

第3年次学校公開研究会（中間発表）資料

新設教科「地域創造学」における社会的実践力の育成

～小・中・高等学校の滑らかな接続を生かして～



2019年11月29日

住田町教育委員会

目 次

◆ 開催要項	1
I 昨年度までの取組について(平成30年度研究開発実施報告書)	4
1. 研究開発の概要	6
2. 研究開発の経緯	7
3. 研究開発の内容	8
(1) 教育課程の編成に向けて	
(2) 実施した指導方法について	
4. 教育研究所を母体とした「地域創造学」を柱とする教育課程推進 に向けた体制づくりに向けて	24
(1) 具体的な取組：教育研究所各部会での取組	
(2) 具体的な取組：各学校での取組	
5. 評価に関する取組について	36
(1) 研究開発委員会と運営指導委員会の開催	
(2) 教育委員会全体会の開催	
(3) 教育研究所の組織について	
6. 研究開発の結果及びその分析	41
7. 今後の研究開発の方向	43
II 今年度の取組について	
1. 今年度取り組んだ研究開発の内容について	45
(1) 教育課程について	
(2) 指導方法、教材等について	

2. 実施の効果について	50
(1) 児童・生徒への効果について	
(2) 教師への効果について	
(3) 保護者等への効果について	
3. 研究実施上の問題点と今後の課題	52
(1) 地域創造学を中核とした系統性のある12年間の教育課程の編成について	
(2) 地域創造学の評価の在り方の検討について	
(3) 異校種間連携について	
(4) 地域との連携の強化について	

III 別添資料

- ・住田町研究開発グランドデザイン
- ・各ステージにおける社会的実践力の系統表

第3年次学校公開研究会

研究主題

新設教科「地域創造学」における社会的実践力の育成
～小・中・高等学校の滑らかな接続を活かして～

期 日

令和元年11月29日（金）

会 場

住田町立世田米小学校 〒029-2311 岩手県気仙郡住田町世田米字川向 55-1
住田町立有住小学校 〒029-2501 岩手県気仙郡住田町上有住字山脈地 5-2
住田町立世田米中学校 〒029-2311 岩手県気仙郡住田町世田米字大崎 72-1
住田町立有住中学校 〒029-2501 岩手県気仙郡住田町上有住字櫃割 12-1
岩手県立住田高等学校 〒029-2311 岩手県気仙郡住田町世田米字川口 12-1
住田町農林会館 〒029-2311 岩手県気仙郡住田町世田米字川向 96-1

主 催

住田町教育委員会 住田町立世田米小学校 住田町立有住小学校
住田町立世田米中学校 住田町立有住中学校 岩手県立住田高等学校

後 援

岩手県教育委員会 住田町

日 程

【午前・・世田米小学校、有住小学校、世田米中学校、有住中学校、住田高校】

8:40	9:00	9:40	9:50	10:35(10:40)	11:00	12:30
受付	授業説明	移動	公開授業	休憩	授業研究会	

【午後・・住田町農林会館】

12:30	14:00	16:00	16:10
昼食・移動	全体会	閉会 行事	

① 世田米小学校会場

学 級	ステージ	授 業 者	単 元 名
2年1組	第1ステージ	小 原 由 佳	「いいな わたしたちのまち②」
6年1組	第3ステージ	千 葉 泰	「考えよう 私たちの町の未来」

② 有住小学校会場

学 級	ステージ	授 業 者	単 元 名
1年1組	第1ステージ	吉 田 由 香	「たのしいな あきのすみた」
3年1組	第2ステージ	菅 原 久里子	「すごいな 住田のいいところ～教えよう～」

③ 世田米中学校会場

学 級	ステージ	授 業 者	単 元 名
1年A組	第3ステージ	杉 下 遼	「プロジェクトに取り組んでみて」
2年A組	第4ステージ	小 岩 洋 介	「プロジェクトに取り組んでみて」

④ 有住中学校会場

学 級	ステージ	授 業 者	単 元 名
1年A組	第3ステージ	黒 坂 太 一 佐々木 佳 恵	「プロジェクトに取り組んでみて」
3年A組	第4ステージ	高 橋 千 尋 村 上 勝 博	「プロジェクト実現に向けて行動しよう」

⑤ 住田高校会場

学 級	ステージ	授 業 者	単 元 名
1年A・B組	第4ステージ	吉 田 一 知	「地域を知らせる」
2年A・B組 3年A・B組	第5ステージ	板 澤 毅 尚	「地域への貢献を考える」

授業研究会

<各会場 11:00~12:30>

会場	助言者	司会者
世田米小学校	岩手大学教育学部 教授 田代高章	住田町立世田米小学校 教諭 泉田剛志
有住小学校	岩手大学教育学部 教授 山本 奨	住田町立有住小学校 教諭 鈴木啓史
世田米中学校	岩手県教育委員会 主任指導主事 佃 拓生	住田町立世田米中学校 教諭 黄川田潤一
有住中学校	東洋大学食環境学部 教授 後藤 顕一	住田町立有住中学校 教諭 志田竜彦
住田高校	岩手県教育委員会 指導主事 佐々木 淳	岩手県立住田高等学校 教諭 利府 崇

全体会

<住田町農林会館 14:00~16:00>

- (1) 挨拶 住田町教育委員会 教育長 菊池 宏
 (2) 研究発表 住田町教育委員会 指導主事 千葉邦彦
 (3) 講演

演題：「教育課程改革における地域創造学の意義と課題」

講師： 岩手大学教育学部 教授 田代高章氏

平成29～32年度文部科学省研究開発学校指定

平成30年度研究開発実施報告書

(第2年次)

子どもたちに新しい時代を切り拓くために必要な資質・能力や心の豊かさを育成するため、小・中・高等学校の滑らかな教育の接続を活かして、新たに教科「地域創造学」を新設した場合の教育課程、指導方法及び評価方法等の在り方に関する研究開発

平成31年3月

住田町立世田米小学校 有住小学校 世田米中学校 有住中学校

岩手県立住田高等学校

本報告書に記載されている内容は、学校教育法施行規則第55条（小学校について）、第79条において準用する第55条（中学校について）、及び第85条（高等学校について）の規定に基づき、教育課程の改善のために文部科学大臣の指定を受けて実施した実証的研究です。

したがって、この研究内容のすべてが直ちに一般の学校における教育課程の編成・実施に適用できる性格のものでないことに留意してお読みください。

3	学校名 住田町立世田米小学校 外4校	29～32
---	--------------------	-------

平成30年度研究開発実施報告書

1 研究開発の概要

(1) 研究のねらい

岩手県の中山間地域に位置し、豊かな自然に恵まれた住田町では、その教育理念として「自立して生き抜く力を身に付け、他者と協働してより豊かな人生や地域づくりを主体的に創造することのできる人材の育成」を掲げ、これまでもあらゆる世代の人材育成のため、その風土を生かした教育を推進してきた地域である。しかしながら、時代の潮流の中、中山間地域における地域課題に直面している現実もまた事実である。本町が、将来にわたって持続可能な町の姿を描く上でも、ふさわしい資質・能力を獲得しながら自己の人生や社会を創造できる人材育成を目指す教育理念は、今後ますます不可欠であり、時代が今後どのように変化を遂げてても不易な考え方である。したがって、この教育理念の実現に向けて、本町で学ぶ子どもたちに、町内の小・中学校及び県立高校が一体となって具体的に育むべき資質・能力を明らかにしながら、着実に育成することができるように、全町を挙げた教育の展開を試みる研究開発に取り組む。

(2) 研究の方針【図1-1：住田町研究開発グランドデザイン】

前述の研究のねらいを踏まえ、本研究開発においては、教育理念の実現に向け、小・中学校及び高等学校が育成を目指す資質・能力を共有し、一体的に推進する教育を展開する。具体的には、12年間を通して、「子どもたちが変化の激しい社会において、充実した人生を実現していくために、豊かな心を持ち、自ら主体的に未来の社会を創造していくことのできる力（社会的実践力）の育成を目指す。そのために、住田町内の教育の特色を生かした教科「地域創造学」を新設し、これを中核に位置付けた12年間の教育課程の編成と、その指導方法及び評価方法等の開発を行っていく。以下大きく3点について、具体的な研究実践をとおして提言を行う。

- 「社会的実践力」を育むため「地域創造学」を据えた教育課程の編成をすること
- 「社会的実践力」を効果的に育む指導方法を探ること
- 「社会的実践力」を評価するための具体的指標の開発を行うこと

(3) 研究仮説

新教科「地域創造学」において、小学校から高等学校までが、新しい時代を切り拓き社会を創造していくための社会的実践力の育成を共通に目指し、以下の手立てを講ずることにより、自立して生き抜く力を身に付け、他者と協働してより豊かな人生や地域づくりを主体的に創造することのできる人材を育成することができるであろう。

そのために具体的な手立てとして、以下の5点に取り組む。

- ① 新しい時代を切り拓くために必要とされる資質・能力（社会的実践力）の規定
- ② 社会的実践力を育成するための教育課程の編成や効果的な指導方法の開発
- ③ 社会的実践力の育成を評価するための具体的指標の開発
- ④ 教育課程の特例による教科「地域創造学」の創設と授業実践
- ⑤ 新設「地域創造学」に関するアンケート調査や外部評価の効果的な活用と教育課程等の在

【図 1-1】 住田町研究開発グランドデザイン



(4) 教育課程の特例

全学年での地域創造学創設にあたり、地域創造学の教科時数を以下のとおり位置付けた。

- ① 小学校では、生活科、道徳、外国語活動及び総合的な学習の時間を減じ、1年生106時間、2年生110時間、3、4、5、6年生では90時間設定した。
- ② 中学校では、道徳、外国語及び総合的な学習の時間を減じ、1年生62時間、2、3年生では82時間設定した。
- ③ 今年度に限り、高等学校では、総合的な探究の時間の中で地域創造学の学習を行った。

※ 平成31年度以降は、1学年においては総合的な学習の時間を、2・3学年においては総合的な学習の時間を減じて、各学年で1単位35時間設定して実施する。

2 研究開発の経緯

(1) 研究の経過

	実施内容等
第2年次	<p>(1) 新教科「地域創造学」の新設</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 小中高12年間の系統的教育課程の実施と修正 ② 育成したい資質・能力を、現在の学校や地域の抱える課題と照らし合わせて再度明確化 ③ 新教科の実践及び検証 ④ 新教科と既存教科との関連を確認 ⑤ 新教科の目標の修正 ⑥ 新教科の評価規準作成と評価方法の研究 ⑦ 地域創造学 学習指導要領解説の執筆開始 <p>(2) 小中高の系統的指導のための各種合同研究会等の実施</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 小中高12年間の実践交流と共通理解 ② 新設教科と既存の教科の関係性をより明確にするための分析 ③ 育成したい資質・能力の育成に向けて、児童生徒が意欲的に授業に取り

	<p>組む指導方法の工夫・改善</p> <p>④ 授業実践を通じた教材の開発と検証</p> <p>(3) 社会的実践力の把握と分析</p> <p>① 児童生徒、教職員、保護者・地域住民へのアンケート調査</p> <p>② 各種調査（全国学力・学習状況調査等）との関連についての分析・評価及び次年度の評価準備</p> <p>運営指導委員の指導を受けながら、社会的実践力を継続的に見取っていくための教育達成測定項目の作成に着手した。整理した社会的実践力に基づき、三年次から複数回に渡り教育達成測定による評価を実施予定。</p> <p>(4) 研究開発実施に関する体制の整備</p> <p>① 運営指導委員会による評価をもとにした第二年次のまとめと第三年次の計画作成</p> <p>② 保護者・地域との連携のための周知、広報活動等の展開</p> <p>③ 本研究に幼保連携型認定こども園を加える見通しがあることから、保育園からの移行準備を進め、新たな幼児教育課程について検討</p>
--	--

(2) 評価に関する取組

	評価方法等
第2年次	<p>(1) 研究開発委員会と運営指導委員会（年3回）の開催 第二年次及び2年間の実践研究についての指導・助言</p> <p>(2) 児童・生徒の実態把握を行い、変容等の研究成果を確かめる評価の在り方を検討</p> <p>① 全国学力・学習状況調査（4月）、岩手県小・中学校学習定着度状況調査（10月）、岩手県中学1年生英語確認調査（CAN-DOテスト）（1月）、岩手県中学校新入生学習状況調査（4月）、岩手県高等学校1年・2年基礎力確認調査（4月）を、新設教科「地域創造学」の目指す資質・能力の観点から分析し、評価計画を作成</p> <p>② 教育達成測定、パフォーマンス評価等を用いた児童・生徒への学習評価と分析の方向性について検討</p> <p>③ 「非認知的能力の見取り」及び「認知的能力の測定」双方についての協議</p> <p>(3) 小・中・高等学校の一貫した教育課程の在り方について、各校の実践事例交流と、成果・課題の明確化</p> <p>① 小・中・高等学校教員が参加する全体会を5月、7月、1月、2月に開催した。</p> <p>② 本研究の成果と課題についての評価を適切に推進できるよう改編した研究所の組織により、学校カリキュラム、地域創造学の評価や指導の在り方等を検討した。</p>

3 研究開発の内容

(1) 教育課程の編成に向けて

① 社会的実践力の再規定について

本研究で育成を目指す「社会的実践力」を以下のように定義している。

【社会的実践力】

児童生徒が変化の激しい社会において、充実した人生を実現するために、豊かな心を持ち、主体的に未来社会を創造していくことができる力

我々が育成を目指す社会的実践力は、地域資源を学習材として横断的で探究的な学習活動が展開されることにより培われていくものである。したがって、社会的実践力は様々な側面や要素を持ち合わせた資質・能力が螺旋的に関わり合いながら培われていく資質・能力であるとの立場に立ち、社会的実践力を形作っている資質・能力は何かという

ことについて検討を重ねてきた。

一年次の研究においては、【表2-1】のとおり、社会的実践力を大きく三つの資質・能力（自立的活動力、人間関係形成力、社会参画に関する力）で構成していると仮定し、更に具体的にすするため、九つの力に細分化して整理を試みた。

【表2-1】 研究一年次 社会的実践力のとらえ（第1次案）

資質能力	内容	観点	
社会的実践力	A 自律的 関する 活動 に 内容	1 自己肯定感	自己の現在の姿を見つめ、良さや課題を認識することのできる力。
		2 感じとる力	情報を自分のこととしてとらえ、主体的な姿勢で向き合い、よさを見出すことのできる力。
		3 課題解決力	身の回りにある課題や問題を発見し、その解決方法を見出す力。必要な情報を収集・分析・活用することや、解決に向けての計画を見通す力も含む。
	B 人 に 関 関 する 係 る 形 成 力	1 他者と向き合う（受容）	多様な他者の考えや立場を理解した上で、相手を尊重することのできる姿勢。
		2 対話への参加（共有）	相手との違いを理解した上で、自分の考えを伝えながら対話を続ける力。
		3 協働	目標達成のために、他者と協力して活動できる力。議論し合ったり、集団活動を統制したりする力も含む。
	C 社 会 参 画 に 関 する 力	1 価値を見出す力	かかわる対象である社会のことを理解したり、そのよさ・価値を認識したりする力。
		2 創造する力	望ましい未来に向かって、新しい視点や価値観を創造していく企画力。
		3 提言する力	自らの考えたことやイメージしていることを自覚し、見直しを持って計画したことを周囲に発信し、行動に移すことで提言をする力。

研究二年次にあたる本年度は、社会的実践力が社会を創造していくための資質・能力であるという立場をより明確化することと、横断的で探究的な学習過程の中で発揮される資質・能力を再検討すること、という二つの観点で検討を重ねた結果、【表2-2】のように再整理をした。これは、地域創造学という教科の特性を踏まえ、社会参画に関する力の中に横断的で探究的な学習過程の中で発揮される資質・能力をより具体的にし、社会参画に関する力を地域創造学で育成する資質・能力の特性として位置付ける意図で、規定し直した。

【表2-2】 研究2年次 社会的実践力のとらえ（第2次案）

表3-1 社会的実践力のとらえ（第2次案）

◎ 地域創造学特有 ☆ 汎用的スキル ★ 態度・意欲・学びの意図

資質・能力の分類	定義	A-Cに関する各資質・能力	資質・能力の具体的な定義
A 社会参画	「ひとものこと」等の地域の実情を理解し、身の回りにある課題や問題を捉え、これからの地域の在り方や、よりよい社会づくりについて提案・発信する資質・能力	1 ◎地域理解	自分たちの地域の歴史や文化、現状や抱えている課題、活用資源を理解する。
		2 ☆見通す力	自分や集団にとっての課題や問題を発見し、その解決方法を見だし、目標を達成する力。問題発見力。情報を適切に活用する力。解決の道筋を見通し計画する力。
		3 ☆多面的・多角的に考える力	根拠を明確にししながら様々な見方や考え方で検討する力。批判的思考力。考えや解釈の妥当性を考える力。予測し判断する力。
		4 ☆提案・発信する力	地域への愛着を持ち、よりよい社会づくりに向けた取組を提案する力。解決策や考えたことについて効果的な発信方法を考える力。新しい視点や価値観を生み出す力。
		5 ★好奇心・探究心	身の回りや地域の事象に興味関心を持つ態度。もつと知りたと思う心。知りたことや解決したいことをみつけようとする姿勢。
		6 ★困難を解決しようとする心	失敗してもあきらめずに挑戦しようとする心。集団の仲間とともに困難な場面に直結しても粘り強く取り組み、最後までやり遂げようとする姿勢。
B 人間関係形成	学びを深めたり、目標の達成を行ったりするために、他者と協力する資質・能力	1 ☆伝え合う力	調べたことや自分の考えを伝える力。根拠的に伝え方を工夫する力。気持ちや感じたことなどを伝える力。双方向的に伝え合う力。
		2 ☆協働する力	目標達成に向かって、他者と協力して活動できる力。議論し合ったり、集団活動を統制したりする力。
		3 ★他者受容	多様な他者の考えや価値観、立場を受け入れる態度。相手を尊重したり敬意を抱いたりする心。
C 自立的活動	自分自身の置かれている状況や考え、感じていることなどを認識し、それに応じてよりよい方向に調整しながら学びや活動を推進する資質・能力。	1 ☆感じ取る力	自己の現在の姿を見つめる力。考えや発想、思いを自分自身で捉え直したり、これからの自分の学びや活動をよりよいものに調整しようとする力。
		2 ☆発信する力	出会う「ひとものこと」に触れて面白さや楽しさ、よさを感じ、自分なりに表現する力。新しい表現の仕方を生み出したりする力。
		3 ★自己肯定感	学びの過程や活動を省察したり、最後までやり遂げた達成感を味わったりしながら自分のよさを捉える心。自分の可能性を前向きに受け止め、より高いもの・よりよいものを目指して取り組もうとする態度。

さらに、文部科学省の实地調査や学校での授業実践研究の成果等を踏まえ、社会的実践力として形作られていく様々な資質・能力に関わる検討を重ね、最終的に【表2-3】のように、12の資質・能力として規定した。これらの12の資質・能力は、「地域創造学においては何を理解して何ができるようになるか」という知識・技能に相当するもの、汎用的スキルに相当するもの、態度・意欲・学びの価値に相当するものに明確化した。そして、知識・技能に相当する資質・能力を「地域理解」と規定し、これ以外の11の資質・能力を「社会参画に関する資質・能力」、「人間関係形成に関する資質・能力」、「自律的活動に関する資質・能力」という大きく三つの側面から分類して、文言も修正を加えて再規定した。

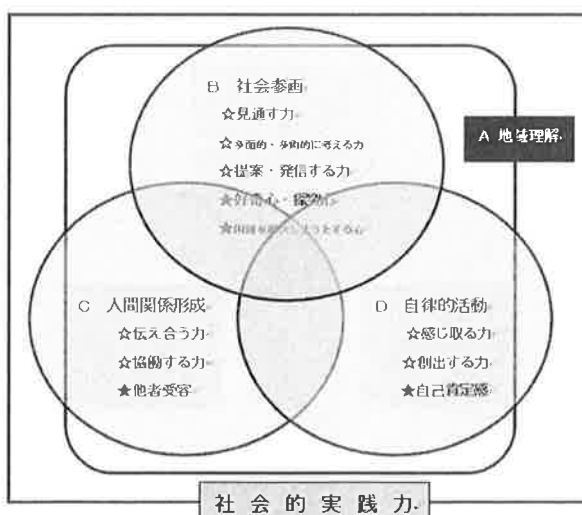
これらの11の資質・能力については、汎用的スキルに相当するもの（☆で表示）として七つの資質・能力（見通す力、多面的・多角的に考える力、提案・発信する力、伝え合う力、協働する力）を位置付け、態度・意欲・学びの価値に相当するもの（★で表示）として四つの資質・能力（好奇心・探究心、困難を解決しようとする心、他者受容、自己肯定感）を位置付けた。他教科との汎用性のある資質・能力として明確に示した。

併せて、地域創造学において育成を目指す社会的実践力は、それぞれ独立して育成されるものではなく、地域理解の資質・能力と相互に関連付けられ、重なり合いながら育成される資質・能力として定義した。地域創造学で育む社会的実践力を形成している資質・能力の関連を【図2】のように示した。

【表2-3】社会的実践力を形作る資質・能力

社会的実践力	A 地域理解	☆見通す力	他教科等との汎用性
	B 社会参画に関する力	☆多面的・多角的に考える力	
		☆提案・発信する力	
		★好奇心・探究心	
		★困難を解決しようとする心	
	C 人間関係形成に関する力	☆伝え合う力	
		☆協働する力	
		★他者受容	
	D 自律的活動に関する力	☆感じ取る力	
		☆創出する力	
		★自己肯定感	

【図2】12の資質・能力の関連



【表2-4】は、社会的実践力を構成する資質・能力の分類とともに、12の資質・能力のそれぞれについて、具体的に示したものである。

【表 2 - 4】研究 2 年次最終；社会的実践力を構成する資質・能力の分類

【社会的実践力】児童生徒が変化の激しい社会において、充実した人生を実現するために、豊かな心をもち、主体的に未来社会を創造していくことができる力

☆ 汎用的スキル ★ 態度・意欲・学びの価値

A 地域理解		自分たちの地域の歴史や文化、現状や抱えている課題、活用資源を理解し、ふるさとに愛着をもちながら町の発展・創造に関わる自分の役割等を捉える。	
B 社会参画に関する資質・能力 「ひと・もの・こと」等の地域の実情を理解し、身の回りにある課題や問題を捉え、これからの地域の在り方や、よりよい社会づくりについての提案・発信に関する資質・能力	1 ☆見通す力	【☆見】	自分や集団にとっての課題や問題を発見し、その解決方法を見いだす問題発見力。情報を適切に活用する力。目標の達成に向かって解決の道筋を見通し計画する力。
	2 ☆多面的・多角的に考える力	【☆多】	根拠を明確にしなが様々な見方や考え方で検討する力。批判的思考力。考えや解釈の妥当性を考える力。予測し判断する力。
	3 ☆提案・発信する力	【☆提】	地域への愛着を持ち、よりよい社会づくりに向けた取組を提案する力。解決策や考えたことについて効果的な発信方法を考える力。新しい視点や価値観を生み出す力。
	4 ★好奇心・探究心	【★好】	身の回りや地域の事象に興味関心を持つ態度。もつと知りたいと思う心。知りたいことや解決したいことをみつけようとする姿勢。
	5 ★困難を解決しようとする心	【★解】	失敗してもあきらめずに挑戦しようとする心。集団の仲間とともに困難な場面に直結しても粘り強く取り組み、最後までやり遂げようとする姿勢。
C 人間関係形成に関する資質・能力 学びを深めたり、目標の達成を行ったりするために、他者と協力することに資質・能力	1 ☆伝え合う力	【☆伝】	調べたことや自分の考えを伝える力。視覚的に伝え方を工夫する力。気持ちや感じたことなどを伝える力。双方向的に伝え合う力。
	2 ☆協働する力	【☆協】	目標達成に向かって、他者と協力して活動できる力。議論し合ったり、集団活動を統制したりする力。
	3 ★他者受容	【★受】	多様な他者の考えや価値観、立場を受け入れる態度。相手を尊重したり敬意を抱いたりする心。
D 自律的活動に関する資質・能力 自分自身の置かれている状況や考え、感じていることなどを認識し、それに応じてよりよい方向に調整しながら学びや活動を推進することに資質・能力	1 ☆感じ取る力	【☆感】	自己の現在の姿を見つめる力。考えや発想、思いを自分自身で捉えたり、捉え直したりして、これからの自分の学びや活動をよりよいものに調整しようとする力。
	2 ☆創出する力	【☆創】	出会う「ひと・もの・こと」に触れて面白さや楽しさ、よさを感じ、自分なりに表現する力。新しい表現の仕方を生み出したりする力。
	3 ★自己肯定感	【★育】	学びの過程や活動を省察したり、最後までやり遂げた達成感を味わったりしながら自分のよさを捉える心。自分の可能性を前向きに受け止め、より高いもの・よりよいものを目指して取り組もうとする態度。

② 社会的実践力の系統表の完成について

本町において一貫した教育課程編成をとおして、目指す資質・能力の育成で重要な考え方の一つに、子どもたちの発達段階を踏まえ、接続学年の系統性を大切し、育ちと学びが滑らかに接続することが挙げられる。そこで、地域創造学の特性を生かし、教科横断的な視点から、校種間、異校種間の接続を図ることにより、着実に社会的実践力が育まれていくよう、発達段階を保育園の年長児も含めた五つのステージのまとまりで編成している。

- 第 1 ステージ：保育園年長児、小学校 1 年、小学校 2 年
- 第 2 ステージ：小学校 3 年、小学校 4 年、
- 第 3 ステージ：小学校 5 年、小学校 6 年、中学校 1 年
- 第 4 ステージ：中学校 2 年、中学校 3 年、高等学校 1 年
- 第 5 ステージ：高等学校 2 年、高等学校 3 年

12 年間をとおして、町全体で目指す子どもたちの育ちの姿を俯瞰しながら、地域創造学で育てたい資質・能力の確実な育成に向け、五つのステージにおける社会的実践力について、その系統性を明らかにした【表 2 - 5】。

この社会的実践力は各ステージにおける発達段階に応じた学びの様相としてまとめているものであり、到達目標という意味合いというよりは、子どもたちの学びの姿を目安として整理している。

③ 新設教科「地域創造学」のねらい（目標）の修正について

研究一年次は、小・中・高等学校が一貫した教育課程を構築し、社会的実践力を系統的に育んでいくために新設教科「地域創造学」の目標を次のように設定し、指導実践を行った。

第1 目標

住田町及び近郊地域社会をフィールドにした横断的・総合的な学習を、探究的な学習活動を意図的・計画的に行うことを通して、新しい時代を切り拓き、社会を創造していくための社会的実践力を身に付けた心豊かな人材を育成することを目指す。

以下のとおり、今年度の実践を通じて地域創造学の目標の共通認識を協議し共有する中で、「横断的・総合的な学習」と「探究的な学習活動」といった表現や、地域創造学だからこそより獲得できる資質・能力を育む学習活動を踏まえ、下記のとおり目標の修正を行い、三年次の実践に反映させていくこととした。

第1 目標 （三年次計画より適用）

住田町及び近郊地域社会をフィールドにした横断的で探究的な学習活動を意図的・計画的に行うことを通して、新しい時代を切り拓き、社会を創造していくための社会的実践力を身に付けた心豊かな人材を育成することを目指す。

二年次の研究開発にあたり、異校種の教員が目標を基に共に学びをデザインする視点、子どもたちの成長過程を資質・能力でつなぐ視点、教科・領域を横断的に捉える視点を持って検討を重ねてきた。実際に、「地域創造学」の実践を通して、地域の関係者の協力を得ながら、各校において活発な教材開発と実践が展開されてきている。今後、教科の目標に基づき、具体的な学びの姿や理念を地域住民や関係機関と一層共有しながら取り組んでいく。

④ 新教科の単元構想及び年間指導計画の作成について

本年度は各学校の実情に応じて、地域創造学のイメージの共有を優先し、単元構想及び授業実践は、各学校にある程度委ねながら取り組んできた。そして、校内研究会相互交流（他校の教員も各校で実施する校内授業研究会に参加できる町研究所事業）の機会や、教務主任・研究主任研修会等において実践への手応えや成果・課題等の共有機会を継続してきた。

これらの実践を踏まえ、三年次の研究実践に向けて、全学年共通単元（8割程度）と各学校の特色を生かした裁量単元（2割程度）で構成する地域創造学の年間指導計画の作成に取り組んだ。三年次の研究に向け、単元配列表を検討している【表2-6】【表2-7】。

単元構想に当たっては、意図的・計画的な指導計画に基づき作成する。「意図的」とは、発達段階を踏まえた学びのステージに沿って、その時期だからこそ学ぶ意義や価値が大きい学習内容を、ふさわしいステージに位置付けることである。「計画的」とは、学習内容のつながりや学習方法、児童生徒の資質・能力の系統性を吟味して位置付けることである。このような意図的・計画的な指導計画のもと、例えば、「住田の産業を通してこれからのまちづくりを考え、発信する学習」、「住田のよさや抱えている課題を学び、実践的な行動をとおして地域へ貢献する学習」、「住田固有の有形無形の文化遺産や、先人の残した優れた文化的業績の価値を教授する学習」、「住田と世界のつながり等に目を向ける国際理解に関する学習」、「地域の中でふるさとの発展のために力を注ぐ人々から生きることや働くことの意味を学ぶ学習」、「学校や地域が一体となって取り組む活動へと発

展的に広がる学習」等を位置付けていく。あらためてふるさと住田を見つめ、よさをとらえ直し、地域社会における文化の創造と発展に貢献できることと、前向きな姿勢で夢や希望を持ち、より良い生き方を志向しながら実践的に行動しようとする態度を育てていくことを目指す。

【表2-6】三年次に向けて現在検討を進めている地域創造学の単元配列表

地域創造学 単元配列表

住田町教育委員会

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
第1ステージ	第1学年	計画づくり	1 しょうがっこう だいすき ①学校探検しよう				2 たのしいな あきのすみた【たねやま】 ①秋を探そう(理由・地域) ②秋のちもちで楽しもう				3 できるようになったよ ①新しい年生を招待しよう ②めりがたや わたしたちの音楽			まともな振り返り
	第2学年	振り返り	1 2年生になったよ ①秋のいいなを数えよう ②お芋焼酎の火付		2 いいな わたしたちのまち① ①まちのことを調べよう(公共施設) ②地域の生き物を育てよう		2 ちいきのきせつを かんじよう ①春をみつけよう ②花や野菜を育てよう ③夏だ！遊ぼう ④虫となかよし ⑤秋を探そう ⑥冬を楽しもう		3 いいな わたしたちのまち② ①理由のいいなを教えよう ②まちのことを調べよう(地域探検)		4 大きくなったよ ありがとう ①大きくなったよ ありがとう			振り返り
第2ステージ	第3学年	計画づくり	1 見つけよう 住田のいいところ ①→②→③				2 教えよう 住田のいいところ ①→②→③				3 受け継ごう 住田のいいところ ①→②→③			振り返り
	第4学年	振り返り	1 ともに生きる～お年寄りと仲よし～				1 氣仙川探検隊 ①調べよう地域の気仙川 ②調べよう気仙川 ③やろふ私たちの気仙川 ④考えよう美しい気仙川				2 (キャリア関係)			振り返り
第3ステージ	第5学年	計画づくり	1 野外活動 単元名は要検討				2 (栗木峠山)				3 (調査学習)			振り返り
	第6学年	振り返り	1 我が町、再発見 ①→②→③				2 考えよう 私たちの町の未来 ①→②→③				3 卒業プロジェクト ①→②→③			振り返り
	第1学年	計画づくり	1 私のライフプラン① ①ガイダンス ②中学校生活について ③まとめと振り返り				3 私のライフプラン② ①ガイダンス ②防災・復興学習 ③まとめと振り返り				5 私のライフプラン③ ①ガイダンス ②進路に向けて ③1年間のまとめと振り返り			振り返り
第4ステージ	第2学年	計画づくり	1 私のライフプラン④ ①ガイダンス ②新入生とともに ③まとめと振り返り				3 私のライフプラン⑤ ①ガイダンス ②委員会から学ぶ(部活・職場体験) ③まとめと振り返り				5 私のライフプラン⑥ ①ガイダンス ②進路に向けて ③1年間のまとめと振り返り			振り返り
		振り返り	2 すみだの魅力開発プロジェクト① ①調査活動 ②計画づくり ③試行と計画の見直し ④中間発表会に向けて ⑤中間発表会と振り返り				4 すみだの魅力開発プロジェクト② ①計画の見直し ②実践活動 ③調査研究報告会に向けて ④報告会と振り返り							
	第3学年	計画づくり	1 私のライフプラン⑦ ①ガイダンス ②進学旅行 ③まとめと振り返り				3 私のライフプラン⑧ ①ガイダンス ②委員会から学ぶ(職場体験) ③まとめと振り返り				5 私のライフプラン⑨ ①ガイダンス ②進路に向けて ③1年間のまとめと振り返り			振り返り
		振り返り	2 すみだの魅力発信プロジェクト① ①調査活動 ②計画づくり ③試行と計画の見直し ④中間発表会に向けて ⑤中間発表会と振り返り				4 すみだの魅力発信プロジェクト② ①計画の見直し ②実践活動 ③調査研究報告会に向けて ④報告会と振り返り							
第1学年	計画づくり	高校生活について知る ①学校ガイダンス ②人間関係作り(SMAP) ③自己理解・得意理解(対適の方法)				地域を知ること ①テーマと計画の立案 ②調査活動(企業訪問・学校訪問)・体験活動(地域文化視察講座) ③まとめと振り返り ④発表(文化祭) (小中高連携文化発表会)				私のライフプラン1 ①ガイダンス ②学防・職業調査研究 ③調査活動(先輩と語る会・進路説明会) ④まとめと振り返り			振り返り	
第5ステージ	第2学年	計画づくり	地域をみつめる1 ①テーマと計画の立案 ②調査活動・体験活動(地域文化視察講座) ③まとめと振り返り ④発表(文化祭)				地域をみつめる2 ①ガイダンス ②地域への産業・文化を学ぶ ③試み(学校・小中学校) ④まとめと振り返り				地域をみつめる3 ①ガイダンス ②計画立案 ③試み(学校) ④まとめと振り返り			振り返り
		振り返り	私のライフプラン2 ①職業・企業調査(企業訪問) ②インターンシップの計画立案 ③体験活動(インターンシップ) ④まとめと振り返り ⑤発表(小中高連携文化発表会)				私のライフプラン3 ①ガイダンス ②卒業生語る会 ③進路説明会 ④まとめと振り返り							
	第3学年	計画づくり	私のライフプラン4 ①ガイダンス ②将来設計を考える ③進路ガイダンス等 ④進路学習の振り返り				地域への貢献を考える ①テーマと計画の立案 ②調査活動 ③まとめと振り返り ④発表(レポート・ポスター)				私のライフプラン5 ①ガイダンス ②発表 ③発表(先輩と語る会)			振り返り

【表 2-7】 三年次に向けて検討している地域創造学の単元計画様式

住田町立 単元名		〇〇 小学校 第 〇 学年 地域創造学 単元計画 〇〇〇
単元の目標		〇 〇 〇 【社会参画に関する資質能力】 【人間関係形成に関する資質能力】 【自律的活動に関する資質能力】
評価規準		
観点		評価規準
A ◎地域理解		【地理】
B 社会参画に関する資質能力	1 ☆見通す力	【☆見】
	2 ☆多角的・多面的に考える力	【☆多】
	3 ☆提案・発信する力	【☆提】
	4 ☆好奇心・探究心	【☆好】
	5 ☆困難を解決しようとする心	【☆解】
C 人間関係形成に関する資質能力	1 ☆伝え合う力	【☆伝】
	2 ☆協働する力	【☆協】
	3 ☆他者受容	【☆受】
D 自律的活動に関する資質能力	1 ☆感じ取る力	【☆感】
	2 ☆創出する力	【☆創】
	3 ☆自己肯定感	【☆肯】

⑤ 地域創造学と各教科等との汎用的な資質・能力を明確にした教育課程の編成について
社会的実践力を構成している 12 の資質・能力は、地域創造学の柱とした 12 年間の教育課程の下、横断的で探究的な学習活動を通して育成されていくことは前述のとおりである。また、他教科等との学習と相互に関連付けられながら、子どもたちがこれから歩いていく社会を生き抜くために、自分と他者との関わりの中で、未知の状況において発揮され、生きて働くものとして、各教科等との学習と相互に関連付けられながら社会的実践力が形成されていく。したがって、各教科等と地域創造学に共通する資質・能力を明らかにした上で教育課程を編成する必要がある。しかしながら、各教科が固有に持っている特質もあるため、地域理解を除いた 11 の資質・能力について、一律に育成が図られるものではなく、その教科によって関連する幅には違いがある。よって、今年度、小中学校における各教科等との関連の度合いを学校カリキュラム検討部会の活動を通して検討した【表 2-8】。

今後は、高等学校における教科に関する分析を行っていく予定である。

【表2-8】 社会的実践力のとらえと教科領域との関連検討表の一部

社会的実践力のとらえと教科・領域との関連検討表(小学校1学年版)

資質・能力の分類	定義	A~Cに関する各資質・能力	創造	幼児教育	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図工	家庭	体育	道徳	外国語	特活	
A. 社会参画力	「ひと・もの・こと」等の地域の実情を理解し、身の回りにある課題や問題を捉え、これからの地域の在り方や、よりよい社会づくりについて提案・発信する資質・能力	1. 地域理解	◎		○						○			○			
		2. 見通す力	◎		○		◎						○			○	
		3. 多面的・多角的に考える力	◎		○		○					○		○	◎		○
		4. 提案・発信する力	◎		◎		○				○	◎		○	○		○
		5. 好奇心・探究心	◎		○		○				○	○		○			○
		6. 困難を解決しようとする心	◎		◎		◎				○	○		○	◎		◎
B. 人間関係形成	学びを深めたり、目標の達成を行ったりするために、他者と協力する資質・能力	1. 伝え合う力	◎		◎		○			◎	○		○			○	
		2. 協働する力	◎		○		○			◎	○		○	○		◎	
		3. 他者受容	◎		◎		◎			○	○		○	◎		◎	
C. 自律的活動	自分の置かれている状況や考え、感じていることなどを認識し、それに応じてよりよい方向に調整しながら学びや価値動を推進する資質・能力	1. 感じ取る力	◎		◎		◎			○	○		○	○		○	
		2. 創出する力	◎		◎					○	◎		○	○		○	
		3. 自己肯定感	◎		○		○			○	○		○	◎		◎	

※各教科・領域において関連性の強い単元

- 国語・・・ おおきくなった。たからものをおしよよう、すきなことな制に、くじぐも、しらせたいな、見せたいな、じどうくらくべ、とむだちに、きててみよう、てがみでしらせよう。これは、なんでしょう。どぼうぶつのおちやん、いいこといっぱい、1年生、こんなことをしたよ
- 算数・・・ たしざん、ひきざん、かたちあそび、おおきいかず、どちらがひろい、ずをつかつかんがえよう、かたちづくり
- 生活・・・
- 音楽・・・ うたでなかよしになろう、はくをかかじてあそぼう、はくをかかじてリズムをうとう、おとをあわせてたのしもう
- 図工・・・ どんどこのはのたのしいな、すなやつちとなかよし、いろいろなかたちのかみから、せんせいあね、おつてたてたら、コロコロべつたんシャカシャカ、やぶいたかたちからうまれたよ、ほこでつくつたよ
- 体育・・・ 体ほくしの運動、多様な動きをつくる運動遊び、走・跳の運動遊び、水遊び、ボールゲーム、鬼遊び、表現遊び
- 道徳・・・ あいさつ、ことばづかい、おせわになっているひと、とむだちのこと、じぶんのよいところ、じぶんでできること、だれにでもこうへいに、みんなのためにはたらく、わたしたちのまち、うつくしいもの
- 特活・・・ 全般

社会的実践力のとらえと教科・領域との関連検討表(中学校1年版)

※重点を置く観点は◎○で示す。

資質・能力の分類	定義	A~Cに関する各資質・能力	創造	幼児教育	国語	社会	数学	理科	生活	音楽	美術	技家	保体	道徳	英語	特活	
A. 社会参画力	「ひと・もの・こと」等の地域の実情を理解し、身の回りにある課題や問題を捉え、これからの地域の在り方や、よりよい社会づくりについて提案・発信する資質・能力	1. 地域理解	◎		○	◎	○	○		○		○		○	◎	○	
		2. 見通す力	◎		○	○	◎	○		○	○	○	○	○	○	○	
		3. 多面的・多角的に考える力	◎		◎	◎	○	○			○	○	○	○	○	◎	○
		4. 提案・発信する力	◎		○	○	○	○			○	○	○	○		◎	○
		5. 好奇心・探究心	◎		◎	◎	○	○			○	○	○	○		○	○
		6. 困難を解決しようとする心	◎		◎	◎	○	○			○	○	○	○	○	○	○
B. 人間関係形成	学びを深めたり、目標の達成を行ったりするために、他者と協力する資質・能力	1. 伝え合う力	◎		◎	○	○	○		◎	○	○	○	○	○	○	
		2. 協働する力	◎		○	○	○	○		◎	○	○	○	○	○	○	
		3. 他者受容	◎		◎	○	○	○		○	○	○	○	○	○	◎	
C. 自律的活動	自分の置かれている状況や考え、感じていることなどを認識し、それに応じてよりよい方向に調整しながら学びや価値動を推進する資質・能力	1. 感じ取る力	◎		○	○	○	○		◎	○	○	○	○	◎	○	
		2. 創出する力	◎		◎	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	
		3. 自己肯定感	◎		○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	

※各教科・領域において関連性の強い単元

- 国語・・・[随筆]空を見上げて [書く]調べたことを報告しよう レポートにまとめる [ノンフィクション]桜守三代 グループディスカッション
- 社会・・・[地理]世界各地の人々の生活と環境、世界の諸地域、世界の様々な地域の調査、日本の姿 [歴史]古代までの日本、中世の日本
- 数学・・・「比例と反比例」
- 理科・・・
- 音楽・・・[鑑賞]イメージをもらす音楽の秘密、曲想との関わり [歌唱]仲間と協力し、表情豊かな表現の工夫
- 美術・・・
- 技家・・・
- 保体・・・
- 道徳・・・
- 英語・・・地域創造学「国際社会に生きる人として」、My Project! &2
- 特活・・・

⑥ 12年間の教育課程と指導方法、評価方法等の開発について

これまでの各学校の地域資源を取り上げた学習を生かしながら、小学校から高等学校まで全学年において新教科「地域創造学」の実践を行い、授業研究会等を通じて、効果的な指導方法について実践研究を推進した。設定したねらいの達成について、具体的な児童生徒の学

びの姿や、学びの積み重ね（計画的な学習の軌跡の追跡）を通して検討してきた。「評価検証部会」では全ての学校の教員が実践交流、検討・協議し、地域創造学にふさわしい評価の在り方について検討を行った。児童生徒の学習の変容や、学習への達成感等を捉える一手法として、教育達成測定の項目を検討し、以下のとおり開発した【表2-9】。この測定項目は、12の資質・能力に沿って児童生徒への質問紙形式で作成したものである。各項目内容は12の資質・能力を身につけた子どもの姿を具体化していることから、教職員全体で具体的な子どもの育ちの姿を見通すことにも役立ち、教師の見取りとあわせて有効活用できるよう、三年次から計画的に活用する。現段階では、第5ステージまで教育達成測定の項目は共通に設定して測っていくこととしている。

【表2-9】教育達成測定シート

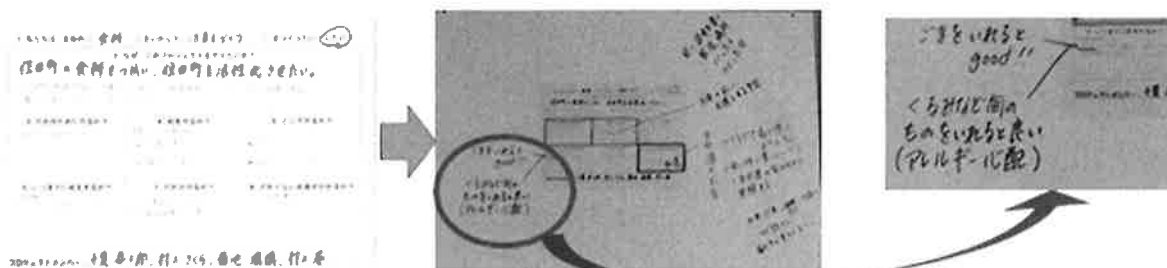
学校		年	名前		
<p>◆次のア～シの項目について、現在のあなたは、どの程度当てはまりますか。当てはまるところに数字一つに○をつけてください。このアンケートは、学習の成績には関係ありません。</p>					
質問内容	1	2	3	4	5
ア 地域に関する学習は、自分に役立っていて、「地域は大切だ」と思うようになり、地域が好きになった。	1	2	3	4	5
イ 自分たちの地域には、どのようなよさや問題があるのかを見つけて、問題の解決のために見通すことができる。	1	2	3	4	5
ウ 地域のことについて正しい情報をもとに、自分の考えがふさわしいかどうかを、その理由も明らかにしながら考える。	1	2	3	4	5
エ 地域のためになることをあれこれ考えたり、生み出ししたりして提案や発信ができる。	1	2	3	4	5
オ 地域のことについてもっと知りたい、調べたいと思うことがたくさんある。	1	2	3	4	5
カ 思った通りに進まないことがあっても、あきらめないでやりとげようとする。	1	2	3	4	5
キ 自分の意見を積極的に言ったり、仲間の意見をよく聞いたりして、仲間とコミュニケーションをとることができる。	1	2	3	4	5
ク 目標の達成に向かって、仲間と協力して活動することができる。	1	2	3	4	5
ケ 仲間の考えには、役立つ意見やよりよい考えがあるので、自分にとって仲間の存在は必要だと思う。	1	2	3	4	5
コ 目標の達成に向けて、自分の取組の進み具合を確認することができる。	1	2	3	4	5
サ 伝えたいことが効果的に伝わるように、いろいろな表現の仕方を考え、その中からふさわしいものを選ぶことができる。	1	2	3	4	5
シ 自分の役割を果たしながら、仲間とともにこれからのいろいろなことに挑戦しようと思っている。	1	2	3	4	5
これで終了です。ありがとうございました。					

また、児童生徒にとって意味のある学習活動を展開するには、児童生徒が自らの学びを振り返って次の学びに向かうことができるようにすることが重要であり、自己評価の力を高めていくことが大切である。そこで、ポートフォリオを活用した評価の実践研究により、児童生徒の作品・写真・作文等を通じて、児童生徒の学びのプロセス・成長過程を見とることができ、各校において活用できる事例を共有することができた。ポートフォリオから児童生徒自身が次の課題を見つけたり、教室の掲示物により学びのプロセスを継続して意識することができたりといった成果も得られた。加えて、保護者や地域の方々からの多角的な評価を得ることなども、児童生徒の次への学習意欲につながった。

教師による単元の目標と評価規準の設定を踏まえ、児童生徒が教師とともに明確な目的意識を持ち、学びの方向性を見通すことができるよう、パフォーマンス課題を適切に評価するためのルーブリック作成についての協議も深めることができた。ルーブリックには、児童生徒が自身の学びの状況を具体的に自覚することができるため、自分の学習状況を調整したり更新したりする学習展開が可能となるよさも共通理解することができた。今後

は、年間指導計画において児童生徒自身が作成し活用するルーブリックを具体的に示して活用を進める。

授業実践例 世田米中学校地域創造学 ポートフォリオ活用の例



生徒：「風味を高める工夫や食物アレルギーについては改善の余地がある、助言を踏まえて、もっと住田町の魅力が伝わるものにしよう」など自己評価につなげた。

教員：「このチームは、プロジェクトプラン発表会を通して、プロジェクト実現のために、より多くの人たちに味わってもらおうための工夫（多面的・多角的な力）に気がついている」などの見取りを総括的な評価につなげた。

(2) 実施した指導方法等について

地域創造学の指導方法の工夫・改善を以下①～⑤の視点で行った。

① 住田型探究のプロセスの検討

地域創造学の年間指導計画には、体験活動を効果的に位置付け、児童生徒と指導者が探究のプロセスを共有しながら展開する学習を重視する。

将来遭遇する様々な問題場面において、簡単に解決策が見出せないような課題についても、主体的な姿勢で、他者と協働しながら解決を目指していく資質・能力を育成できるよう、これまでの研究実践において、各教科等における見方・考え方を総合的に活用して、広範な事象を多様な角度から俯瞰して捉え、実社会・実生活の課題を探究し、地域や人とのつながりの中で自己の生き方を問い続けるという地域創造学の特質に応じた見方・考え方を働かすことができるような探究のプロセスの在り方を探ってきた。

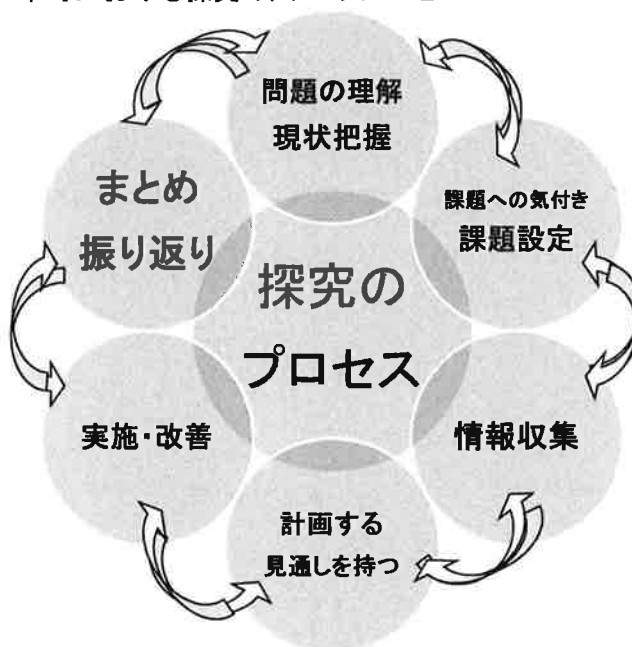
町内の児童生徒の探究活動の実態を基に、収集した情報や体験活動等から得た知識や考えを具体的に整理したり、分析・考察したりする過程を一層重視する必要があると判断したことから、試案として、「①課題の設定、②情報の収集、③アイデアの拡散と収束、④アイデアの具現化、⑤改善、⑥まとめと振り返り」という六つのプロセスを設定し、児童生徒の探究活動が質的に深まっていくよう、発展的に繰り返される「探究的な学習過程」を重視した学習を展開してきた【表 2-10】。また、各プロセスでの児童生徒の学びの姿を具体的に挙げて、全教職員で児童生徒の探究的な学習活動での学びの様相を共通理解できるようにした。

【表 2-4】 住田型探究のプロセス（試案）

① 問題の理解	② 情報収集	③ アイデアの拡散と収束	④ アイデアの具現化	⑤ 改善	⑥ まとめと振り返り
<ul style="list-style-type: none"> ・見る、聴く ・理由や根拠を問う ・気付く ・共感する 	<ul style="list-style-type: none"> ・調べる ・整理する ・分析する ・課題を焦点化する 	<ul style="list-style-type: none"> ・解決案を発想する ・解決策を組み立てる ・解決策を見直す 	<ul style="list-style-type: none"> ・解決策の実実施計画を構想する ・解決策を実践する 	<ul style="list-style-type: none"> ・実践を対象の立場から問い直す ・実践に不足していることを付け加える ・実践を修正してやり直す ・実践を繰り返す 	<ul style="list-style-type: none"> ・実践の成果と課題をまとめて発表する ・実践後の自分の思いや願いを伝える ・学びの意味や価値を表現する

一般的な探究のプロセスは、「問題の理解」をスタートとし、「課題設定」、「情報収集」…と進んでいくことが多いが、本年度の授業実践をとおして、プロセスはいつでも一方向とは限らず、時に「実践・改善」と「見直しを持つ」プロセスが往還されたり、「問題の理解」からではない段階が起点となって学びが始まったりすることもあることが明らかになった【表2-11】。次年度においても、児童生徒へのよりよい探究のプロセスを模索して指導に当たっていく。単元の特質に応じた柔軟で多様な学習展開の実現が図られるようにする。

【表2-11】 試案(表2-4)を基に決定した本町における探究の六つのプロセス



授業実践例 世田米中学校地域創造学

「住田の魅力が高めるために、住田の〇〇をいかしたプロジェクトを考えよう」より



プロセスや学習過程のねらいを工夫し、生徒の意欲や思いを起点として主体的な探究活動となるようねらいをもって実践を行った。「住田の魅力が高めるために、住田の〇〇をいかしたプロジェクトを考えよう」のテーマのもと、テーマ達成に向けて、実践を通して一年間の探究のプロセスを具体化することに取り組んだ。これらの各校実践から、上記の探究のプロセスについての検討を行った。

学習過程	ねらい
1 問題の理解	① 「住田でこんなことができれば！」という夢を集める 参観授業で級友・先生・父母にそれぞれの夢と考えの理由を直接聴いて、その思いを共感的に受け止める。
	② 夢を分類して町への願いを整理する 集めた夢をジャンルとフィールドで整理し、その背景にある町の課題を考える。
	③ 町の魅力が高めるために取り組みたいことを考える みんなの夢(ニーズ)と町の資源(よさ)を繋げて、自分たちは町の魅力が高めるために何に取り組んでみたいかを焦点化する。

	④ 地域創造学で取り組んでみたいことを発表する	地域創造学に対する思いを言葉にして、今後の活動への期待を高める。
2 情報収集	① 作戦会議	プロジェクトチームを編成し、今後の活動計画を立てる。
	② 町でのリサーチ	プロジェクトに関するリサーチ範囲を町に広げ、町にあるもの・あつて欲しいもの・足りないもの・無いもの等を把握する。
3 アイデアの具体化	① アイデアの創出	どうすれば夢を実現することができるか、自由な発想でアイデアを多数出す。
	② アイデアを取捨・選択・総合して活動計画を立てる	プロジェクトが本当に町の魅力を高めることになるか、6W2Hによるプランニングシートを作成し、実際に実行可能なのか、町民の理解と協力が得られるのか等、プロジェクトをクリティカルに検討し、活動計画書を作成・発表する。
	③ 実験と試行錯誤	プロジェクトの活動計画に沿って自分たちで実験し、課題を見つけて改善の方策を探る。
	④ プロジェクト・プランの提案と修正	プロジェクト・プラン発表会で企画提案し、参加者や関係者に活動に対する率直な感想や意見を求める。
改善 4 実施・	プロジェクトの実施	企画提案した計画に沿って、プロジェクト実現に向けて活動する。
	プロジェクトの改善	人材、費用、時間等の点からプロジェクトの課題を捉え、適宜、プロジェクトの改善を図る。
振り 5 まとめ と 振り返り	① 活動記録のまとめ	関係者の声を元に目的を達成できたのかどうか検証し、成果や課題、今後の展望を明らかにする。
	② 報告会	今年度の活動の成果・課題・今後の展望を、生徒や関係者に報告する。
	③ 一年間の活動の振り返り	一年間の活動を通して、自身にどのような力が育まれたか振り返る。

② 体験活動を伴う学習活動の指導方法の在り方について

児童生徒が学びの意義や価値について実感を持ちながら学習が展開できるよう、特に体験活動を伴う学習活動の指導方法の在り方について考える実践を展開することができた。各ステージにおける体験活動が、児童生徒の学びにどのような意義をもたらしていくのか、指導者が見通していることが肝要である。第1ステージの学習活動では、発達を視座にしている幼児教育との接続も踏まえ、具体的な体験活動をとおして、自分なりの知を意味付けしながら、体験や実践による知を構成していくことができるようにすることである。自分の思いや願いが解決の目的や課題となって、学習活動を展開しながら試行錯誤を繰り返したり、自分なりの見通しをもってやり遂げたり、粘り強く取り組んだりする体験活動を重視していく。また、ステージが進むにつれて、体験活動を通して、課題意識が醸成されたり、課題に対する見立てや予想について検証したりする学習が充実していく。ステージに応じた体験活動の位置付けや意義を今後一層大切にしていく。

以下の表は、本年度、各校種で地域創造学に位置付けた体験活動の種類をまとめたものである。今後、体験活動の意義や位置付けを踏まえ、ステージに応じた学習内容や学習方法の系統性等について吟味し、単元配列の改善に生かしていく見込みである。

【H30 地域創造学に位置付けた体験活動】

小学校	中学校	高等学校
学校探検、植物の栽培、生き物飼育、町探検、郷土芸能、水生生物調査、キャップハンディ体験、野外活動（種山高原）、等	町の魅力を高めるためのプロジェクト活動（町内でのリサーチ、プラン作成と実践等）、農業体験、職場体験、福祉体験、等	インターンシップ、地域文化選択講座、桜植樹ボランティア、小学生への読み聞かせ活動 等

授業実践例

- ア 世田米小学校 第1学年 地域創造学
「楽しいな！住田 みつけよう！たの
しもう！すみたのしぜん」より

森の案内人さんや住田高校の生徒と
一緒に種山ヶ原の季節の自然と触れ合
う体験



- イ 世田米小学校 第3学年 地域創造学
「わくわく住田のかん光 ～名所に行ってみよう～」
児童の学びの履歴を踏まえて町内の観光名所（神社や
民俗資料館など）を訪問



- ウ 世田米小学校 第4学年 地域創造学「すごいぞ！住田～
気仙川探検隊～」
水質や川の保全についての探究活動



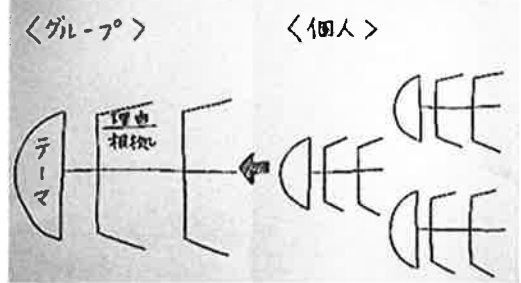
- エ 住田高等学校 第2学年 地域創造学 「小学生に読み聞かせ」
世田米・有住の両小学校を訪問して読み聞かせを行う活動（一部は高校生が選書）



③ 言語活動の位置付け

充実した言語活動を活動の中に適切に位置付けることは、思考力・判断力・表現力等の育成を図る上で重要である。また、他者と協働してよりよい考えを作り出したり、方向性を見出したりする上で、コミュニケーション能力は必須である。これらの認識に立ち、思考ツールを用いながら自他の考えを交わし合う場面や、体験を踏まえて思いや願いを発信する場面等の多様な言語活動を位置付けたことにより、どの校種の児童生徒も主体的に取り組む様子が見られ、学びが一層深まってきた。

授業実践例 有住小学校第5学年 地域創造学 「製鉄～見たい知りたい大追跡！」より
グループでの考えを可視化して、子どもたちの思考を深めたり広めたりすることができた



④ 主体的な思考を促す適切な支援

各校の校内研究会では、探究的な学習のプロセスの在り方や発問の吟味等について、活発に意見が交わされ、児童生徒の主体的な思考を促すための適切な支援の在り方に関わる授業改善が行われてきた。「主体的」ということで児童生徒に活動全てが委ねられるのではなく、教師が指導を行う場面、見守る場面、助言をする場面等を見極めるとともに、思考したことを言語化する場面と位置付ける等、前述の言語活動の充実が図られるよう、時と場を捉えた指導者の適切な支援を行ってきた。

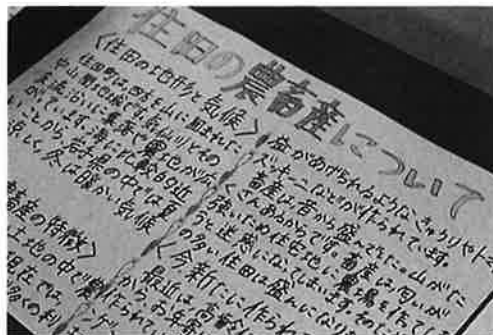
授業実践例 有住小学校第2学年 地域創造学 「もっとしりたい ありすのまち②」より

保育園時や1年時より親しんでいる自然の中での体験的な学びを生かしながら地域の外部人材を活用し、児童の「気づき」を引き出すプロセスを工夫した。



授業実践例 有住中学校第2、3学年 地域創造学 「地域学習」より

個人で調査・探究活動を行う際に、オリエンテーションや予備調査を経て課題の設定へと進むプロセスの工夫を行ったことで、「誰に」「何を」伝えたいかをまとめ、その目的にあった方法で作品を作り発表し合う活動がより充実した。



⑤ 地域創造学に関する異校種の指導との接続について意識した指導の工夫

研究指定二年間の大きな成果は、共通教科目標を立て、小・中・高等学校をとおした教科の新設と、育成を目指す資質・能力の規定を行い、同じ方向を見通して進めることができた点である。目指す資質・能力の育成のために、小学校～高等学校までの12年間を、第1ステージ～第5ステージまでの5ステージに分け、併せて、第1ステージには、年長5歳児を加えた。このステージ設定は、幼小の円滑な接続を図りながら、12年間を見通すツールとして有効であった。今後は、前述の「社会的実践力の資質・能力系統表」に整理している各ステージの児童生徒の学びの姿を目安にしながら、異校種の指導の接続にも配慮した指導の充実に向けて取り組む。そのために、資質・能力の育成につながっているかどうか、ステージ内の単元配列について、学習内容と学習方法の両面から検討を重ねていく。

国語科単元「未来がよりよくあるために」と関連させ、自分の考えを文章にすることと併せて横断的に学習を進めた。6年生の学習が、同じステージである中学校1年生以降の地域創造学の学びへとうまくつながるよう、情報共有やステージの系統性を意識した検討の必要性が明らかになった。



「(2) 実施した指導方法等について」に挙げた①～⑤は、いずれも社会的実践力の育成に向けて、児童生徒の豊かな学びの実現のために必要な視点であり、児童生徒に応じた指導方法等の工夫として適切なものであると考える。これまでの実践を通して明らかになった課題の解決に向けて、引き続き授業実践を通してより有効な指導方法を探るとともに、地域創造学を据えた教育課程の編成につながるよう、質的な改善を図っていく。

4 教育研究所を母体とした「地域創造学」を柱とする教育課程推進に向けた体制づくりに向けて

(1) 具体的な取組：教育研究所各部会での取組

今年度再編した4つの部会では、各小・中学校長が部長を務め、部会の運営に当たった。

【学校カリキュラム検討部会】

1 部会のねらい

地域創造学を据えた教育課程全体を検討する。各教科・領域での社会的実践力育成の在り方を含む。次年度の教育課程及び学校運営計画書作成。

2 今年度の部会研究の流れ

◇ 5月 1日(火) <第1回部会>

部会の組織づくり・ねらいの確認・今後の研究推進の方向性の確認 等

◇ 7月 9日(月) <第2回部会> 教務主任研と同時開催

カリキュラムに係る課題の洗い出し 等

◇ 12月 7日(金) <第3回部会>

研究のまとめ(追課題の確認)・全体発表に向けて 等

◇ (以降) 来年度の部会研究の方向性の確認

3 教科関連検討表【第1次試案】の作成

4 その他、部会内で検討した事項とまとめ

◇各校の教育課程の中の位置付けはどうなっているか

- ◎ 「地域創造学」は、各教科や領域で培った力を活用した学びである。 (世小)
- ◎ 「地域創造学」は、各教科との関連の中核に位置する。 (有小)
- ◎ 「地域創造学」は、学習指導要領の目指す資質・能力を育てる教科・領域の外側にあり、新たな学びのインターフェイスとなる。 (世中)
- ◎ 「地域創造学」は、各教科・領域を下支えする学習として、教育課程全体を包括している。(有中)

◇他教科、他領域との関連は？（学習指導要領との関連）

- ◎ ほとんどの教科・領域との関連性が強い。 【 関連検討表第1次試案・・・参照 】

◇実際の学習内容について

- ◎ 低学年「楽しいな」・中学年「すごいぞ」・高学年「幸せ創るまち」とテーマ設定した。校外学習や体験学習、探究活動が盛り込まれる。学習のゴールとして「誰に」「どのような形で」等の伝える方法の検討を続けている。(世小)
- ◎ 低・自然と触れ合う、中・自然環境を考える、高・先人の暮らしを想像する。体験活動を柱とする。伝承的な活動ももう一つの柱。4年・自然と環境についてまとめ。6年・将来と自分について発信する。(有小)
- ◎ グループで、地域の過去・現在・未来に関わる広い範囲にある課題をとらえ、6W2Hで解決に当たる。地域や町に実現可能な提言をする形で発表する。(世中)
- ◎ 学年ごとの大きなテーマ（自然・働く・社会とのつながり）のもと、個人課題を解決する探究活動。ゼミ形式で指導、多様な発表形式。この他に森林学習や交流学習、伝統の継承も「創造」に含む。(有中)

◇各校のその他の特色について

- ◎ 外国語活動との関連で、AET来校日に設定。学習課題ごとのグループ学習（協働の学び）に意図的に取り組む。教科横断的な内容も多く、国語・社会・図工との関連が多い。(世小)
- ◎ IET来校日に設定。他教科で、課題を自分のものにする・自分の言葉で表現する・相手意識を持つての説明・「創造」との関連を意識させた。他学年・保育園・中学校との交流や学び、伝える活動。(有小)
- ◎ 地域の魅力を高めるプロジェクト学習。社会に出た時に役立つような学びの体験。授業に地域住民の参加を仕組んでいる。(世中)
- ◎ 基本的に週1～2時間。体験活動・調査活動はまとめて設定。探究学習は、全校生徒と全教師のゼミ形式。テーマ設定・調査方法・まとめ・発表・評価までゼミ担当教師が行う。(有中)

5 成果と課題・今後の研究推進にあたって

(成 果)

- 関連検討表があることによって、各教科・領域では、地域創造学で育成したい12の資質を意識して指導することに繋がるであろう。
- 地域創造学においても、各教科・領域との関連を意識した指導ができれば、探究活動にもより深まりが出てくるのであろう。
- 各担任（教科担任）が関連検討表を作成したこと自体が、地域創造学の全体像の把握や研究意欲の向上につながったのではないかと。

(課 題)

- △ 関連表の様式と内容の吟味が必要である。(◎印・○印が多すぎる感もあり・・・?)
- △ 時数を振替えている「道徳」「外国語(英語)」に特化した、詳しい関連検討表があると、

より地域創造学の在り方が見えてくるのではないか。(振替が適切かどうかも含めて。)
△ 地域創造学の年間計画と、関連する教科単元の内容と履修時期の相関図があるとより有効に活用できるものになるのではないか。

【評価検証部会】

1 目的

- ① 必要な資質・能力「社会的実践力」が育成できたのかを図るための評価方法を研究する
- ② 振り返りと評価の在り方について検討し、実践モデルを提案する

2 研究内容

- ① 作成する年間指導計画の単元に合わせ、児童生徒の学びの過程を蓄積するポートフォリオを作成し、多角的評価のために活用する
- ② パフォーマンス評価について、児童生徒自身の「振り返り」や「メタ認知」する機会の設定を研究する。また、児童生徒が次への課題や展望を見いだしていくことのできる評価の在り方についても検討する。
- ③ 指導者と児童生徒が目標（ルーブリック）を共有してパフォーマンス評価を実施する方法を検討する。そして児童生徒本人も評価の有用性を感じられるようなルーブリックを作成する。
- ④ 実践結果及び研修会における研究授業の指導案等の資料、実践、考察をまとめる。

3 経過

ポートフォリオについては、児童生徒の作品・写真・作文等により、児童生徒の学びのプロセス・成長過程を見取ることができ、各校において活用できた。「パフォーマンス課題」に取り組みせることで児童生徒の力を「見える化」することができた。児童生徒とルーブリックを共有することは、目標が具体的であることから、児童生徒が自信の立ち位置を自覚することができることにより、学習意欲の持続だけでなく、評価に対する納得感や学習への達成感を味わうことに有効であった。さらに、まとめの生成物を活用して学習過程を振り返ることもできた。

4 今年度の成果

- ・ ポートフォリオ（成果物）を残すことによって、学びのプロセスと成長過程を見ることができた。
- ・ ポートフォリオから次の課題を児童生徒自身が見つけることができた。教室掲示によって学びのプロセスを継続して意識することができた。
- ・ 保護者や地域の方々からの多角的な評価により次の課題を持ち、意欲を高めることができた。
- ・ 他の学年に評価してもらうことが意欲付けに繋がった。等、があげられる。

5 見えてきた課題

- ・ 1 2 観点がどんな力なのか、学年の発達段階に応じて、わかりやすい言葉にする。
- ・ より客観的なパフォーマンス評価をするため、ルーブリックを作成する。
- ・ 児童生徒自身によるルーブリックの作成も考えていく必要がある。

【学習指導検証部会】

1 今年度に実施したこと

- ① 地域との連携による住田型探究のプロセス（教育課程のねらい・指導の手立て）の試行
- ② 地域創造学の学習記録と自己評価・相互評価（主体的に学習を進めるための手立て）の蓄積
- ③ 生徒による学習のポートフォリオの蓄積（児童生徒ファイルによる）
- ④ 教師による児童生徒の学習状況の記録（抽出児を中心に）
- ⑤ 地域人材・資源リストの作成（町教育コーディネーターと各校副校長の連携による）
- ⑥ 2019年度の年間指導計画作成（町共通単元の創出）

2 部会開催を通じて見えてきたこと

- ① 現在は各校が独自に「地域創造学」を実践しているため、各ステージを意識した学校間・校種間の連携が弱かった。新たなものを創り上げることもあり、校内の取組だけで精一杯のところもあった。
- ② 第1回部会では、各校の進捗状況の確認やステージごとの情報交流を図るためにも、今年度授業研究会の相互参加を設定していたが、各校の事情もあり授業は参観しても研究会に参加出来ない人が多く、校内研究の高まりはあったかと思われるが、ステージでの高まりまでには、至らない点があった。
- ③ 研究を進めていくうえで、課題になっている点も出てきた。
以上のことより、
ア 各校実践の成果と課題
イ 研究推進上の課題 の2点を各校から集約し、まとめることになった。

3 部会としての成果と課題

成果

- ・各校の実践を通して、本町における探究の6つのプロセスを固めることが出来た。
- ・研究運営面に関する各校教員の問題意識や各校の研究推進上の課題を共有することが出来た。

課題

- ・各校の授業研究会への相互参加を部会研究会として設定したが、各校の行事計画がそれを考慮してつくられておらず、互いに都合が付かず終いになってしまった。
- ・各校で地域創造学を実践したため、研究に携わる各校教員が全体、異校種間、同校種間で直接意見を交流させる場が不足し、各ステージを意識した学校間・校種間の連携や共通カリキュラム作成は、年度後半にならないと進められなかった。
- ・今後は各校が独自に進めてきた方法にこだわることなく、各ステージで目指す資質・能力を示した社会的実践力の系統表に基いて、12年間の連続性と発展性のある単元づくりを行い、共通カリキュラムの作成を進めていく。

【就学前教育研究部会】

1 目的

平成27年度改訂版 幼保一元化をすすめる「すみた幼児教育（保育）プラン」を今年度と来年度の2年間かけて改訂すること

2 今年度の取り組み

小学校に関わる内容は2020年度完全実施の小学校学習指導要領に沿って、また、保育園に関わる内容は今年度から施行されている保育指針に照らし合わせて、改訂しなければならないところをピックアップすること。保小それぞれの内容を見直しと同時に改訂をしながらの作業を進めた。

〈小学校の活動〉

小学校の部員は部長と養護教諭2名、作業には1年生担任の協力を得て進めた。そのため、次の項目について改訂したり改訂部分の確認をしたりすることができた。

- ・ 小学校入学にむけてのなめらかな移行のために身に付けさせたいこと（改訂）
- ・ 6歳（1年生）スタートカリキュラム（改訂）
- ・ 《接続期の指導内容》健康、人間関係、環境、言葉、表現 について（改訂部分の確認）

〈保育園の活動〉

保育園の部員は園長と園長補佐の4名、作業はそれぞれの園の保育士が協力して作業を進めた。来年度それぞれの園で終了した後、引き続きすり合わせを行うこととした。今年度は次の項目について改訂した。

- ・ 全体的な計画（改訂）
- ・ 保育所児童保育要録（保育に関する記録）（改訂）

「小学校入学にむけてのなめらかな移行のために身に付けさせたいこと」と「保育所児童保要録（保育に関する記録）」については、今年度から実際に活用してみて、不都合がないか小学校、保育園から意見を頂戴し確定する予定。

（2）具体的な取組：各学校での取組

「地域創造学」を中核に据えた教育課程の実践を開始した本年度は、各校の社会的実践力を育むための研究推進がより一層加速した。

【世田米小学校】

研究主題

地域で育ち、主体的・対話的・創造的に学ぶ児童の育成

研究の目標

地域の教材で学ぶ体験的・探究的な学習活動を通し、学びを推進する課題設定・ゴールまでを見通した計画作り・協働的な探究活動・自分の思いや願いを表出するまとめまでのプロセスを繰り返し、主体的・対話的・創造的に学ぶ児童を育成する。

研究内容

- 1 主体的・対話的・創造的に学び「社会的実践力」を育むための工夫
 - （1）学びを推進する課題設定
 - （2）ゴールまでを見通した計画作り
 - （3）協働的な探究活動
 - （4）自分の思いや願いを表出するまとめ

2 「地域創造学」にかかわる学習計画の修正

- (1) 各学年の内容の妥当性の検証
- (2) 教科や領域を横断的にとらえた教育課程の編成

研究方法

- 1 参考文献や資料による理論研究
- 2 授業実践を通じた仮説の検証
- 3 先進校視察や各種研修会への参加
- 4 住田町研究所における「地域創造学」への取り組み

成果と課題

【成果】

- 校内ではテーマ・単元の設定が体系化されてきている。学習を進める上での迷いや悩みが出たときには、各ステージのテーマ「たのしいな！住田」「すごいぞ！住田」「幸せ創る まち住田」に立ち返り、「地域」を教材とした学習を6学年での提言に向けて積み上げて いることを確認することで、方向性を同じくして各学年の学習が進められている。
- 学年の計画（導入部分）で、児童の思いを引き出し、児童の意見を基に学習内容を設定したことで、見学場所が同じになったり、体験が似たようなものになったりする場合もあったが、今までとは児童の学習に対する意識が変わってきている。活動ありきではなく、テーマに沿って、児童が「自分たちの町」について「自分たちで」学習しているという意識を持って取り組んでいることが大きい。「地域創造学が好き」「楽しい」と話す児童が多いことも大きな成果といえる。
- 単元のゴール（教師にとっては姿・児童にとっては活動）を明確にして単元に取り組むことで、見通しをもち、主体的に探究活動に取り組むことができた。

【課題】

- 「総合的な学習の時間」とは違う「地域創造学」の特性については、「地域の現在の姿を知るだけではなく、今後の在り方を考えていくことではないか」という意見や「自分たちの学びが誰かのためになるものではないか」などの話が出たが、まだ十分に捉えることができておらず、度々職員間で話題にあがっている。
- 校内では、各学年の内容の妥当性について検討を重ねているが、他校種との関連性やつながりは明確でない。1・2年生は保育園、5・6年生は中学1年生と同じステージであることから、情報を共有したり、学習内容について共に検討したりしていく必要がある。また、各ステージにおいて身につけさせたい技能や知識の整理が必要である。

【有住小学校】

研究主題

自らの思いをもち、主体的に学習する児童の育成
～創造学習における体験活動を位置付けた探究的な学習活動を通して～

仮説

住田の人・もの・ことに関わる体験活動を位置付け、児童の思いや願い、課題意識を育むような探究的な学習活動を発展的に繰り返す中で、以下の内容の手立てを講じれば、その実現や解決に向けて粘り強く追求し、主体的に学習に取り組む児童が育成されるであろう。

研究の内容

(1) 探究のプロセスの確立

児童の思いや願い，課題意識を育み，その実現に向けて粘り強く追究していくためには，学び方を身に付け，解決に向けての見通しをもつことが大切である。

(2) 価値ある体験活動を位置付ける

児童がどのようなことに興味を抱いたり関心を寄せたりしているかを考えた体験活動や，自分の力を発揮してより実感をもって学習に取り組んだり試行錯誤したりできるような価値ある体験活動を位置付ける。また，学習材は児童の思いや願いが高まる可能性がある対象を選定するとともに，学習材の良さが引き出されるようにする。

(3) 言語活動の充実

体験したことや収集した情報を言語により分析したりまとめたりすることを，問題の解決や探究的な学習の過程に適切に位置付けることが大切である。言語活動の充実により，課題解決の際に必要な思考力・判断力・表現力の育成に繋がるようにする。

(4) 他教科との関連を図り，既習事項を生かした学習活動

児童が主体者となって学習が進められるようにするためには，他教科との関連を図り，既習事項を活用していくことが大切である。学習したことを活用して調査結果をグラフ化したり，発表の場面においては国語科で身に付けた話す力を発揮したりするなど身に付けた知識や技能を活用することにより，身に付けた知識や技能は確かになり一層生きて働くようになる。

(5) ゲストティーチャー（G T）の有効活用

地域特有の学習材に触れることで児童の思いや願い，課題意識を育んだり，調べ学習で課題解決に向けて追求したりする際に，G Tの存在は欠かせない。学習材の良さを知るG Tと共に体験活動することは，興味・関心や意欲を高め，児童の思いや願い，課題意識を育む。地域特有のことについては，インターネットや本による調べ学習や周りの人に聞くだけでは，簡単に解決できないことが多くある。そのような場面で，地域に詳しく，専門的な知識を有するG Tを活用することで，解決したり解決の糸口を見出したりすることができる。それは，試行錯誤を繰り返して得られる成果であり，粘り強く追求しようとする意欲へと繋がっていく。その際に初めからG Tを頼るのではなく，試行錯誤の過程において活用するようにし，学びの主体が児童であることを重視する。児童の思考の流れや単元の目標を踏まえたG Tの活用を進める。

(6) 評価の在り方を検討する

児童がどのような評価内容なのかを理解していない状況で指導者の主観によるのみ評価を行うのではなく，児童が次の課題や展望を見出していくことのできるような評価の在り方を検討する。

来年度の研究の方向性について

- ・ 研究部だけに任せることなく，研究部を中心に研究推進委員会を機能させ，校内研を進めていくことが大切である。

- ・ 共通理解のもとに「何を」「どうするために」「どのように取り組むか」「検証はどうするか」を念頭において研究に取り組む。
- ・ 来年度の学習発表会の持ち方（創造の発表）についても検討する場があるとよい。
- ・ 新年度最初の校内研は、少し時間がかかっても資料も用いて今までの経緯、研究の概要、今年度共通確認しなければいけないことをしっかりと確認することが必要である。

【世田米中学校】

研究主題

思考力・判断力・表現力を発揮して課題解決する生徒の育成
～主体的・協働的な学び方を身に付ける授業づくりをとおして～

研究仮説

主体的・協働的な学び方を身に付ける授業づくりに取り組めば、思考力・判断力・表現力を発揮して課題解決する生徒を育てることができるだろう。

今年度の重点取組

- ① 「世中授業スタンダード」をベースにした授業づくりを継続する。今年度は特に、研究開発学校の取組を最重点として、以下に示す「社会的実践力をはぐくむ地域創造学の指導方法」を基にして題材を開発し、実践と評価を通して研究開発学校の組織的な取組を推進するものとする。

世中授業スタンダード

学び方	世中授業スタンダード ※日々の授業で主体的・協働的な学び方を身に付ける学び方	地域創造学 ※地域の課題解決を通して社会的実践力をはぐくむ学び方
1. 問いを持って主体的に学ぶ	①学習課題の解決に向けてどんな力を使ってどのように学ぶかを見通す	①ガイダンス
	②疑問や課題意識を持つ	②地域の生の声を聴いて問題を共感的に理解する
2. 気づきや考えを互いに説明し学び合う	③情報分析から論理的に考える手がかかりをつかむ（事実と根拠を問う）	③関係情報を収集して解決したい課題を焦点化する。
	④自分の考えとその理由を話す／他の考えを聞く（見方や考え方を広げる）	④課題解決のためのアイデアを多数創出する。
	⑤それでよいか問い直す（critical thinking）	⑤より良い解決方法を見つけるためにアイデアの本質や前提、誤解の有無等を問い続けてじっくり考察した上で課題解決策を決める。
3. 全員がわかる・できるまで	⑥自分の考えを書く（1.主張2.根拠3.補足4.結論）	⑥活動計画書を作成・発表して、課題解決活動に取り組む。
	⑦知識・技能の確実な理解と習得に向けて互いに質問し教え合う。	⑦活動に対する率直な感想や意見をフィードバックしながら活動を繰り返す。

教え合う	⑧教科書を使って授業で学んだ知識・技能のまとめをしっかりと行う。	③活動記録をまとめて成果・課題・今後の展望を明らかにする。
	⑨学習内容の習得状況を自己評価・相互評価して今後の学習に意欲を持つ。	④社会的実践力に関する自己評価・相互評価をして今後の活動に意欲を持つ。
4. 学んだことの意味や価値を考える	⑩学びを振り返り教科の特質に応じた見方や考え方のよさや今後の学習や生活に生かしたいことを自分の言葉で表現する。	⑩今回の学びの意味や価値を考え、活動後の自分の思いや願いを地域の人に伝える。

- ② 教科指導は、昨年度の実践で浮かび上がった教科担任個人の課題に基づき、各自が重点を置きたいところを定めて授業改善に取り組むこととする。

研究結果の分析と考察

I 「世中授業スタンダード」に基づく授業実践及び各教科における授業改善に関わって

(1) 今年度の成果

- 職員会議や校内研究会を通して、「世中授業スタンダード」について確認する機会を得ることができた。
- 各教科・領域等において、「問いを持って主体的に学ぶ」活動、「気づきや考えを互いに説明しあう」活動、「学んだことの意味や価値を考える」活動を、意図的・計画的に設定し実践することができた。
- 各教科において、諸調査等の結果を踏まえ、生徒達が苦手としていることを把握し、苦手克服のために補充活動を行ったり、学習活動を見直したりすることができた。

(2) 今年度の課題

- ▲ 授業改善のための教員相互による授業を見合う機会を、計画的に実施することができなかった。→年度当初に計画していなかったため。

II 地域創造学の実践に関わって

(1) 今年度の成果

① 学習過程と探求のプロセスについて

- 生徒の「取り組みたい!」「やりたい!」という思いを起点とした活動を実践することができた。
- 「住田の魅力を高めるために、住田の〇〇をいかしたプロジェクトを考えよう」のテーマのもと、テーマ達成に向けて、実践を通して一年間の探求のプロセスを具体化することができた。))
- 教員による制限を極力加えず、生徒の願いに寄り添った活動を実現することができた。

② ポートフォリオについて

- 生徒の振り返りを、「振り返りシート」で積み重ねることができた。
- 「振り返りシート」の他に、「プロジェクト・プランシート」や「プロジェクト報告レポート」といった文章資料や、活動の様子を撮影した写真等のデータを蓄積することができた。
- 制作物を廊下や学級等に掲示し進捗状況を可視化したり、文化祭の作品の一つとし

て展示したりすることができた。

- 継続して、生徒自身が活動の様子を記録することができた。
(③自己評価・相互評価と④思考のフレームワークは別冊資料へ)

③ 地域の方を招いての発表会について

- 練習も含め、自分の考えを、より多くの人に伝えるためのスキルを学ぶ機会になった。
- 地域の方の助言が得られたので、生徒だけではなく、教員にとっても学びのある活動となった。地域の方の助言は、次の活動への動機付けに繋がった。
- 自分達が気づけなかった、自分達のアイデア等の良さを地域の方々から評価していただいたことで、生徒は普段の授業と異なる嬉しさを感じただろうし、改めて生徒の頑張りや良さに気がつくきっかけになった。
- 地域創造学で培った力が学校活動全般にも活かされた姿が見られるようになった。

(2) 今年度の課題

① 学習過程と探求のプロセスについて

- ▲ 時間が限られているため、プロジェクト終了の活動・内容について、生徒と教員の間で年度当初に見通しを持つことが必要。

② ポートフォリオについて

- ▲ データを蓄積したものの、評価等に十分に活用することは出来なかったもので、次年度は活用のあり方についても検討していきたい。
- ▲ 今年度は「活動の中で上手くいったこと」に関するデータが蓄積された。生徒の変容を見取るために「活動の中でつまづいたこと・上手くいかなかったこと」も記録できるようにする。

③ 地域の方を招いての発表会について

- ▲ 実施して得ることが多かったものの、年度当初に、時期を確定する必要がある。
- ▲ 発表会・報告会前に地域の方との関わりを持ち、発表会・報告会では、プロジェクト実現のための具体的な助言をもらえるように工夫したい。

【有住中学校】

研究主題

社会的実践力を身に付けた生徒の育成 ～課題解決の取組への支援を通して～

研究の仮説

教師が、課題解決の活動を通して生徒に身に付けさせたい社会的実践力を明確に持って取り組ませ、活動後の教師と生徒のふりかえりから有効な指導方法を検討してフィードバックすることで、社会的実践力の育成と、より有効な指導方法の開発につながるであろう。

研究の内容と方法

(1) 本校生徒の実態把握

- ① アンケートや行事後のふりかえりの実施と分析
- ② 学校満足度尺度及び学校生活意欲尺度 (hyper-QU) の分析

(2) 課題解決的な地域学習の支援

- ① 生徒の地域や生活をテーマとした課題の設定とその解決のため取組の支援
 - ② 課題解決の取組の中での、「自律的活動力」「人間関係形成力」「社会参画力」の育成とふりかえり、フィードバック
 - ③ 小学校や高校との「地域創造学」の活動を中心にした連携の模索
- (3) 社会的実践力の育成とその支援方法の考察
- ① 表現（作品・発表など）の評価
 - ② ふりかえり，アンケートによる評価
 - ③ 各種調査・質問紙の結果分析

考察と今後の課題

(1) 地域学習の進め方や内容について

地域学習は、各資質・能力の「地域理解」の獲得や伸長に有効と考える。また、その学習を通して外部との連絡の取り方やメディアの活用の仕方、訪問のマナーなど多くの事を学ぶことができる。

全体的な進め方は、今年度までと同じで良いと考える。ただし、1年生と2・3年生の活動については、全てを同じペースで進める必要はなく、それぞれのステージや学校体制を鑑みて計画を立てたり、調整したりしながら進める。

地域学習のまとめ方や活かし方（ゴール）を良く検討し、はじめの段階で示して学習を進めさせる。その際、学年や発達段階、技能の習熟度など考慮して計画を立てる。

(案)

学年	学年のテーマ	発表	主に伸ばしたい技能
1	住田の <u>自然</u> について学ぶ	調べたことを発表	調べ方・まとめ方
2	住田の <u>観光・産業</u> について学ぶ	調べたことを発表	人との関わり方
3	住田について学び、 <u>行動</u> する	行動したことを発表	自律した行動

(2) 研究授業について

来年度は、地域創造学ではなく他の教科についても積極的に研究授業や授業交流を行い、多角的・多面的に主題に沿った研究を進める。

【岩手県立住田高等学校】

研究開発課題

住田町の施策である、中山間地域の特徴を生かした新しい価値観の構築と、中・長期的な展望に立った教育施策における人材育成を合わせて実現する試みとして高校においても地域創造学が設定された。本校の生徒は素直で真面目であるが、その反面、自主性に欠けるところもある。変化の激しい社会においては、主体的に考え行動する力を身につけ、自ら社会を創造しようとする態度を育てることが必要である。本校では地域創造学とおして、自己の生き方を考え、よりよい進路を選択することを目指す。

実施内容

【生徒の活動】

高校生活ガイダンス

- ①対象：1年生 ②実施時期：4月
- ③ねらい：活動を通して望ましい人間関係を形成し、諸問題を解決しようとする自主的・実践的な態度や健全な生活態度を育てる。
- ④内容：スクールカウンセラーを講師にむかえ、人間関係プログラムを実施した。

大学・企業見学

- ①対象：1年生 ②実施時期：7月
- ③ねらい：進路目標設定に向けて意識を高める。職業観の育成を図る。
- ④内容：大学見学会では東北文化学園大学を訪問し、大学施設・専門学校施設の見学やOBの話を聞くなどした。企業見学では、太平洋セメント大船渡工場とゆわて吉田工業を訪問した。

インターンシップ

- ① 対象：2年生
- ② 実施時期：7月
- ③ ねらい：勤労の大切さ、正しい職業観を学び、職場のマナーや就業規則および知識や技術習得するなかで自己の適性や将来の進路を考える機会とする。
- ④ 内容：気仙管内の事業所で生徒が2日間のインターンシップを行った。事前の事業所調べや訪問確認の電話は生徒主体となって行った。事後には企業への礼状を書き送付した。またレポートを作成し住高祭で展示した。

地域文化選択講座

- ① 対象：1・2年生
- ② 実施時期：9月
- ③ ねらい：地域の方々の教育力を生かし、普段教室では学ぶことのできない地域の文化・産業や伝統技術について学ぶことにより、先達の努力を理解するとともに、地域についての関心を高め、地域理解の一助とする。
- ④ 内容：世田米中・有住中の3年生とともに、5つの講座から希望するものを選択し受講。

先輩と語る会

- ① 対象：全学年
- ② 実施時期：2月
- ③ ねらい：進路学習を計画的・効率的に進めるために、先輩の体験談から情報を得る機会とする。
- ④ 内容：3年生全員が発表者となり、自分の進路達成について後輩に伝える。1・2年生は質問するなどしてこれからの進路目標について考えた。

読み聞かせ

- ① 対象：2年生
- ② 実施時期：2月
- ③ ねらい：読み聞かせを通して、児童の読書への関心を深める。小学生と高校生の交流を促進する場とする。
- ④ 内容：世田米小と有住小の児童に絵本の読み聞かせを行う。世田米小では6年生の地域創造学の発表を聞く。

【教員研修】

1 校内研修会①

対象として新しく来た先生方を中心に、研究開発学校についての説明を行った。

2 校内研修会②

指導主事を講師に招き、地域創造学が育む力について分析した。

3 第4ステージにおける中高協議会

1月23日に実施。指導主事、教育コーディネーターをアドバイザーとして招き、中学校の担当者と中高連携について協議した。

成果と課題

1 成果

- 校内研修会をとおして、地域創造学で身につけさせたい力について校内で共通理解を図ることができた。
- 各活動について社会的実践力のどの力を伸ばすものなのか、実施要項に記載したり、生徒の自己評価に加えたりしながら、意識して活動させる素地ができてきた。
- 教員全員が他校種の地域創造学の授業を見学するなどして、校種間連携について見通しをもつことができた。
- 教育課程やカリキュラムを見直す機会となった。

2 課題

- 従来からある活動を地域創造学としているため、各活動を系統性の視点から見直す。
- ステージごとのまとまりや発展が見えない。特に最終ステージとなるはずの第5ステージの目指すものがあいまいだと捉えている。また、第4ステージである中2・3と高1の連携が弱い。
- 生徒の変容を見取るためのアンケートなど評価の在り方の検討が必要である。
- 生徒の自主性を伸ばし、新たな価値を見いだす力を培うために、教員の意識改革も必要である。

次年度に向けて

- 単元計画表に基づいて、毎週1時間の地域創造学を計画的に進めていく。
- 高校として地域創造学の目指す姿を明確にし、教員・生徒で共通理解する。
- 中学校とも連携を取り、第4ステージから第5ステージへの発展が見える実践を行う。
- 生徒の変容を見取るためのアンケートや評価を実施する。

5 評価に関する取組について

(1) 研究開発委員会と運営指導委員会の開催

研究所運営委員会として年に2回開催している会議において、各小・中学校長、県立住田高等学校、各保育園長、副校長会代表、教務主任代表と研究開発の内容や方向性について検討を行った。また、本年度から、校長・園長会議の開催にあわせて研究部長会議を開催し、研究開発についての検討、協議を行ってきた。

また、一年次に引き続き、7名の外部有識者による運営指導委員会を組織し、研究について専門的見地から直接ご指導をいただいた。

【運営指導委員会】

組織

氏名	所属	職名	備考（専門分野等）
田代 高章	岩手大学教育学部	教授	教育方法学
山本 奨	岩手大学教育学部	教授	学校臨床心理学
後藤 顕一	東洋大学食環境科学部	教授	教育課程
毛内 嘉威	秋田公立美術大学	副学長	道德教育、教育課程
武藤美由紀	岩手県教育委員会学校 教育課	主任指導主事	
千葉賢一	岩手県教育委員会沿岸	主任指導主事	
杉田哲朗	南部教育事務所	指導主事	

開催記録

	開催期日 場所	内容
第1回	平成30年7月31日 住田町役場	<p>【指導助言者】</p> <p>東洋大学食環境科学部 後藤 顕一 教授 (テレビ会議システムにより参加)</p> <p>岩手県教育委員会学校教育課 武藤美由紀 主任指導主事</p> <p>岩手県教育委員会沿岸南部教育事務所 千葉賢一 主任指導主事 杉田哲朗 指導主事</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究の方向性や計画等についての指導助言 ・30年度の7月までの研究状況について
第2回	平成30年12月20日 住田町役場	<p>【指導助言者】</p> <p>東洋大学食環境科学部 後藤 顕一 教授 秋田公立美術大学 毛内 嘉威 副学長</p> <p>岩手県教育委員会学校教育課 武藤美由紀 主任指導主事</p> <p>岩手県教育委員会沿岸南部教育事務所 千葉賢一 主任指導主事 杉田哲朗 指導主事</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究の方向性についての指導助言 ・30年度自己評価書、31年度実施計画書について
第3回	平成31年2月14日 住田町役場	<p>【指導助言者】</p> <p>岩手大学教育学部 山本 奨 教授 東洋大学食環境科学部 後藤 顕一 教授</p> <p>岩手県教育委員会学校教育課 武藤美由紀 主任指導主事</p> <p>岩手県教育委員会沿岸南部教育事務所 千葉賢一 主任指導主事 杉田哲朗 指導主事</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究のまとめに対する評価と次年度計画についての指導助言、31年度実施計画書（修正版）について

(2) 教育研究所全体会の開催について

町の教育研究所では、町内小・中学校教諭、県立高等学校教諭、町内保育士を研究員として委嘱し、年4回の全体会開催を通じて各校の取組の共有を図っている。

【今年度の研究所全体会の開催】

	開催日	出席人数 小中高教員 保育士	会場	内容
第1回	5/1	51人	住田町役場 町民ホール	今年度計画確認、部会開催
第2回	7/31	47人	住田町役場 町内各施設等	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の文化等について4つのグループに分かれ、教員が地域人材に学ぶワークショップ型研修会 ・森林環境学習、民俗資料館、農業、まちづくりの4コース
第3回	1/8	55人	住田町役場 町民ホール	<ul style="list-style-type: none"> ・研究発表会 「4つの研究部会による実践研究発表」 ・次年度の年間計画検討 ・映像を活用した授業検討
第4回	2/14	44人	住田町役場 町民ホール	<ul style="list-style-type: none"> ・今後の展望について ・ステージ毎に年間指導計画について協議

【7月第3回全体会の様子】

まちづくりコースで町歩きガイドの案内で町内を巡る教職員



【2月第4回全体会の様子】

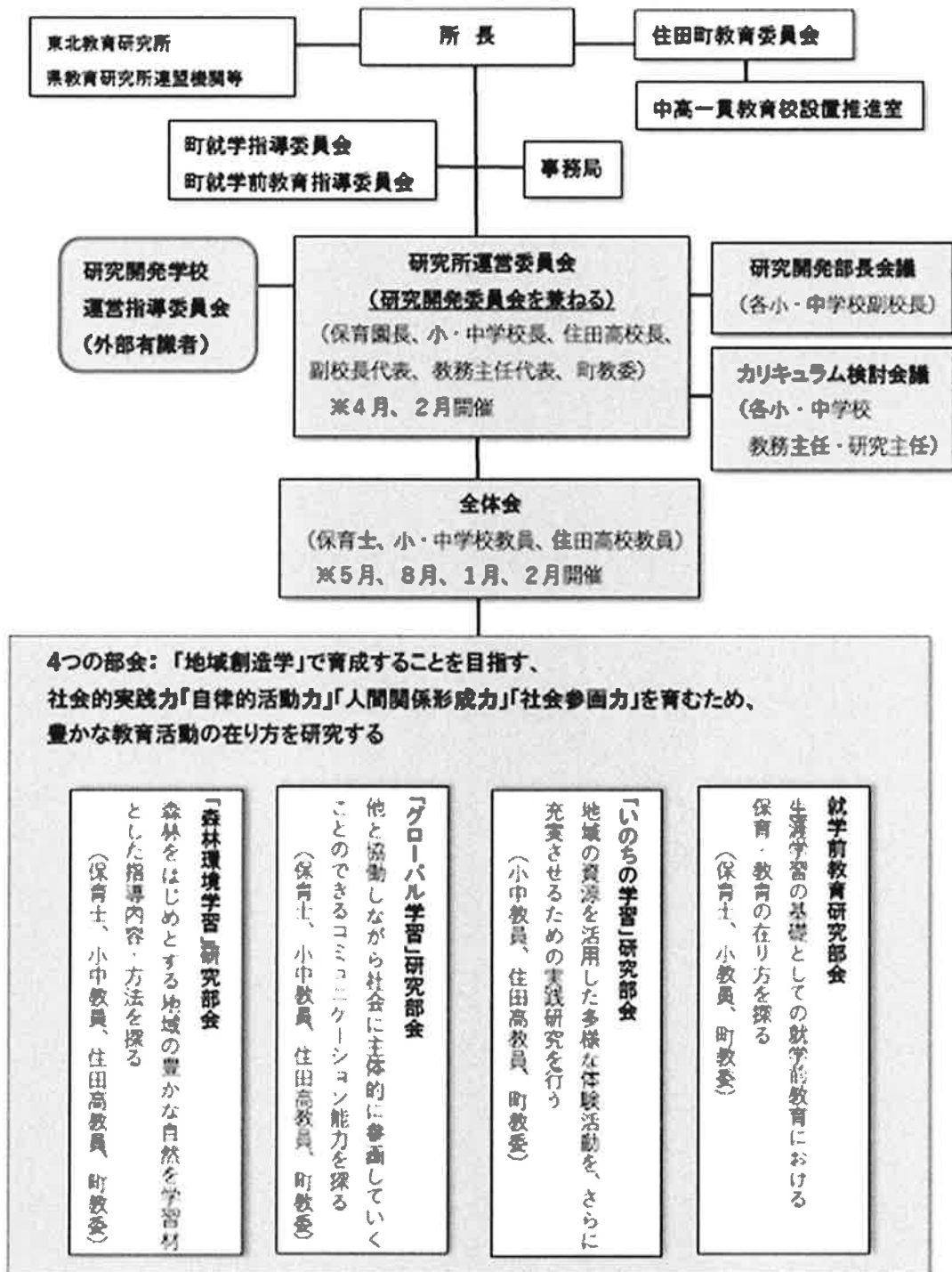
次年度の地域創造学カリキュラムを検討



(3) 教育研究所の組織について

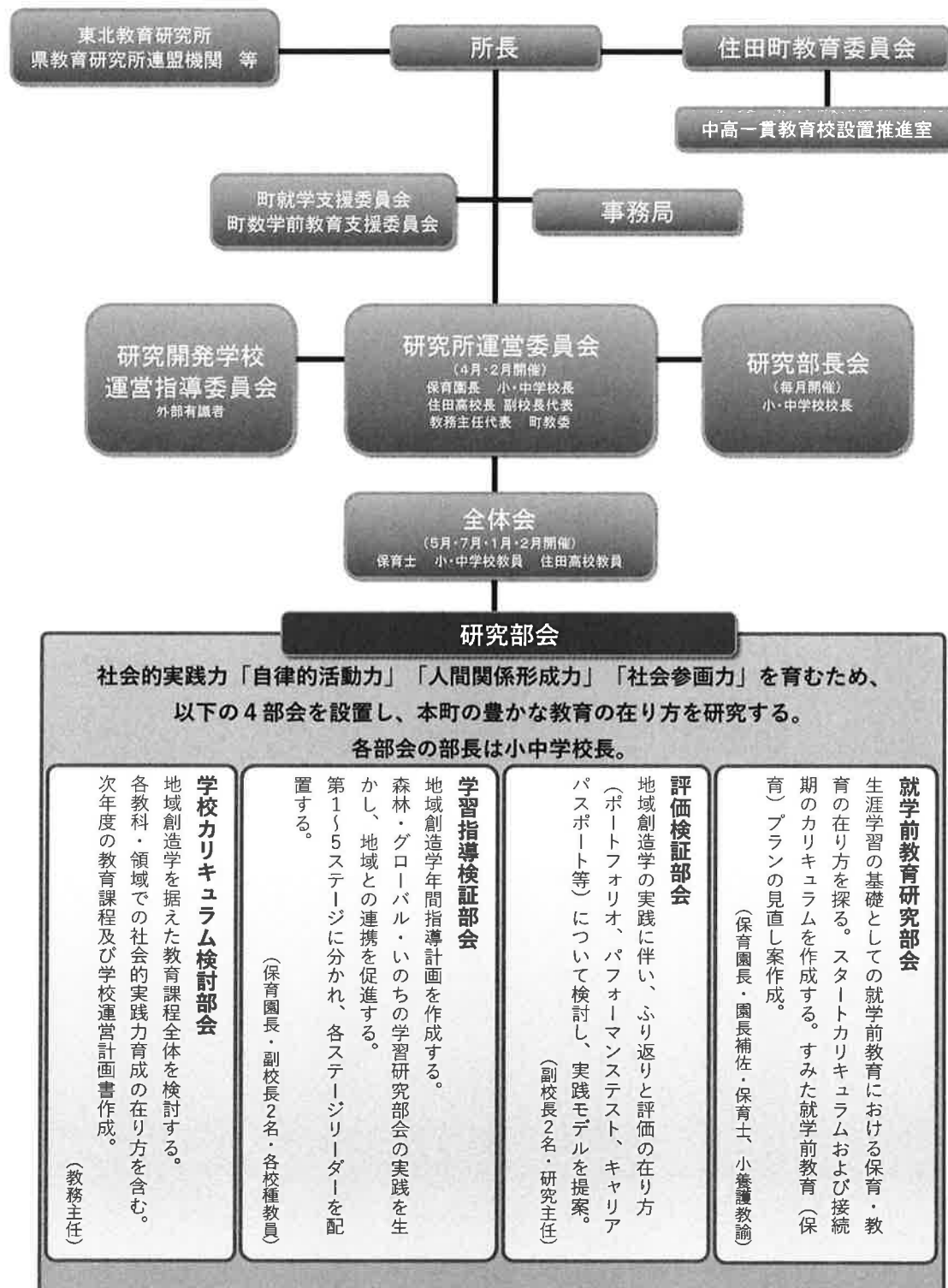
研究一年次、各部会での取組をとおして異校種の教員が交流し互いの実践について相互理解を図ることと、各学校の校内研究において、目指す資質・能力の検討と実際の教育課程実施に向けての準備を行うことを通じ、町の教育研究所体制について改編の必要性が議論されるようになった【表5-1】。

表5-1【H29年度研究所組織図】



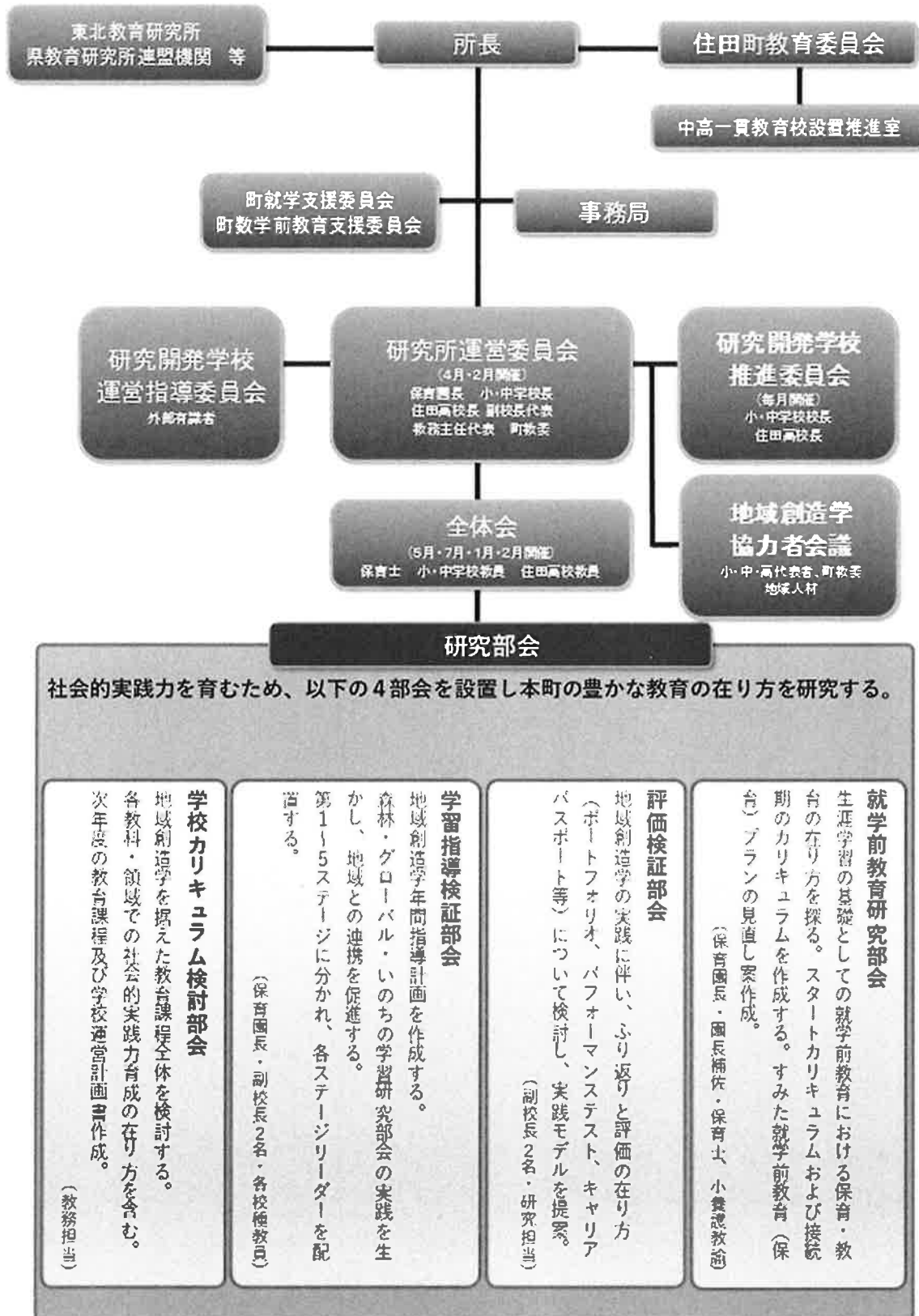
30年度から地域創造学を据えた教育課程を実施しながら、その成果や課題を継続的に検証していくために、研究所の組織を大幅に改編し、取り組んでいくこととした【表5-2】。

表5-2【H30年度研究所組織図】



三年次は各校の代表者、町教育委員会と、地域創造学の学びに協力をいただく地域の方々とで、地域創造学の構想や学習予定、協力を要請したいこと、地域の方からの助言や意見等を直接お聞きし協議する場として、新規に地域創造学協力者会議を開催することとした【表5-3】。

表5-3【H31年度研究所組織図案】



6 研究開発の結果及びその分析

(1) 実施による効果

ア 児童生徒への効果

本年度、初めて「地域創造学」を実践し、教師の様々な工夫により地域を題材とする学びが展開されたが、学習指導検証部会において、2学期までの学習の段階で、この教科を「楽しい」、「好き」と肯定的に話す児童生徒の声があることが報告された。

授業実践においては、小学校3年生の学習の中で、ご神木として親しまれている神社の未来について、「600歳以上生きているご神木に、そのまま生きのびてほしい」

「自分が大人になった時もっと大きくなってほしい。」と地域の願いや思いを大切に受け止める様子が見られた。また、4年生の学習の中では、実際に学んだ木工に関する探究的な学びを通して、「もっと住田の木が有名になるように、自分でもできることをやりたいなと思いました。」とふり返りを述べた上で、社会参画に関する資質・能力について高い自己評価ができている様子が見られるなど、児童生徒が資質・能力の伸長を自覚しながら地域創造学を意欲的に取り組んでいる様子が分かる。

主体的な学びを通して、目指す資質・能力の育成につながるよう、地域創造学を学ぶ意義や成果を自覚的できるような単元構成や評価の在り方を充実させ、児童生徒が本町で地域創造学を学ぶ価値を実感できるようにしていきたい。

イ 教師への効果

地域創造学の実践が始まったことにより、時数を減じた教科との違いや、地域創造学の特色や独自性を見出し、目指す資質・能力に向けた学びのデザインに熱心に取り組む教師の姿が見られる。

町教育研究所事業の「校内研相互交流事業」では、各校で開催する校内研究会を他校に開き、本年度は地域創造学の学習指導案を基に、年間12回の研究授業公開を開催した。異校種を含む多くの教員が、互いの授業実践を参観し、地域創造学の構築に向けて、よりよい単元構成や探究のプロセスの在り方など、多様な視点を持つことができた。

地域創造学に取り組む必要性を受け止め、横断的な視点で資質・能力を捉える見方を持ちながら、次年度の年間指導計画作成に着手し、見えてきた課題（ステージの意識をした校種間連携への困難、定期的な協議の場の創出、教職員によるボトムアップ型研究へのシフトの必要性など）もあり、これも実践の効果の一つとして受け止めている。そして、地域創造学をまとめたりやつながりのあるものにした、という推進の原動力となる教師の意識の高まりが如実に現れてきた。

文部科学省実地調査研究協議 教職員所感より

- ・生徒の中からなかなか考えが出ない時、どうしても待ちきれずアドバイスや出してほしい答えに導くような助言をしてしまうので、日頃の授業や指導を含めて気をつけていきたい。(中)
- ・教師側の指導計画で実践するのではなく、生徒の実態から考えることが大切だと思った。小中高と連携して実践を積み重ねていくなれば、互いに授業を見合ったり、情報交流をしたりする時間をとりたい。保育園でできていたことを小学校で再度指導するということがあるが、互いの児童の実態を把握する場が必要だと思う。資質・能力の系統表をフルに活用し、連携して力を付けていきたい。(小)
- ・この事業は誰かが何かをするのを待つのではなく、地域を深く学び、社会的実践力を付けるにはどうしたらよいか、学校で考えながらとにかく活動していくことに意義があると思う。高校でも失敗をおそれず、生徒を信じて実践をしていきたい。(高)

地域人材を講師として実施した第2回全体会 教職員所感より

【民俗資料館コース】

- ・民俗資料館がコンパクトではあるが様々な視点の収集がされていてとても興味深く見ることができました。講師の佐々木さんの説明もとても分かりやすかったです。個人的には気仙大工や金の採掘等、当時の文化に関わっていた点に興味をひかれました。農業で使う道具は小学校でも教科書に載っているようですが、実際に使う場面も見られたら楽しそうだなと思いました。砂金採りでは川で涼み自然を堪能できましたし、「金」という物質の重さを体験できて、理科的な面でも捉えることができました。教科横断的な視点は学びを楽しく深いものにするのだなあと改めて感じました。自身の授業でもそのような視点(教科横断的)を取り入れていきたいなと思いました。(高)

【農業コース】

・町農政課の松田さんからコンパクトに住田町における農業の現状と近年の歴史、課題と施策について説明していただき、住田町の農業の状況を理解することができた。やはり基礎知識は大切だと思った。また、農家の佐藤さんから生のご意見を伺うことができて、農業の現状に係る理解が深まった。こうして実地で行うフィールドワークは学習にとってなくてはならない物だと認識を新たにしました。（高）

【まちづくりコース】

・私は地域創造学の意義の一つを「町の新しい魅力を見つける活動」と考えています。その点から考えると、本日の活動はとて有意味だったと思います。特に印象深かったことは、町歩きをした上で、他地域の人と感想交流をした活動です。なぜならば、私たちが普段見慣れているものが、他地域出身の人から見ると珍しいものであり、地元出身の人との話しと重なることで、より魅力的なものに感じてくることを実感できたからです。この経験を踏まえると、もしかすると子どもの視点での住田の魅力がもっともっと発見されるのではないかと…という可能性について考えさせられる機会になりました。（中）

ウ 保護者等への効果

上記「校内研相互交流事業」での授業公開には自治公民館等地域の方々や地域創造学のゲストティーチャーの方々にも参加して頂いた。その時の体験を基に、児童生徒がどのように学びを深め、変容したかということ、実際の児童生徒の姿を通して見届けて頂く機会として、非常に効果があった。授業の参観や参画等、実際に関わることで、地域創造学について理解してくださる方々も増えてきた。

また、教職員と地域人材の連携がうまく図られていくよう、第2回教育研究所全体会には、教員研修の講師を地域の人材に依頼し、体験型の研修会を位置付けて実施した。地域の方々や講師となる取組は、教員が地域を知る学びとなるだけでなく、将来的に授業づくりに参画していただく可能性のある方々と、その方向性の一旦を共有することにつながる好機となった。

外部人材として授業に関わっていただいた町民の方の声

- ・発表の際のポスター等成果物を見ると、調査活動に来た際はまっさらな状態だった中学生が、そこにたどり着くまでの経過で得るものは大きかったのではと感じる。精度が上がっていると感じる。
- ・農業や畜産などの分野はリタイヤして在宅の方も多く、調査活動の際に昔の状況と一緒に教えてくれる方もいると思う。中学生の活動時間に合わせてもらえる可能性がある。もっと地域の方とつながっては。
- ・調査活動の際に協力してくれそうな人材を役場職員がコーディネートすることもできるのでは。
- ・印象的だったのは形になることを目指すというより、苦労や見直し、計画の変更などを経験させることに重きを置いていると感じたこと。既存の教科との違いと感じる。いろいろ悩んだ経過が大事なのだと思った。
- ・インタビューに答えたことが、生徒の役にたったのかどうか分からない。全ての質問に答えられればいいのだが。
- ・素直な生徒たちであると感じた。

7 今後の研究開発の方向

これまでの研究により明らかになった問題点と課題について、以下のように捉えている。

(1) 新教科「地域創造学」実施に伴う、評価の在り方の検討について

地域創造学を含む教育課程が、児童生徒にどのような影響を与えるのか、適切な評価の在り方を検討していく必要がある。校種や児童生徒の発達段階の違うことから、これまで同様、各校の協議と異校種での協議を続けていく。

今年度末に作成した教育達成測定については、質問紙によるものであり、継続的に測定していく。また、より客観的に見取るために、町外の協力校の児童生徒の調査結果と比較しながら分析を行う。あくまでも教育達成測定は子どもの資質・能力の定着を完全に網羅するものではないため、教師の子どもたちの変容の見取りも重ねながら分析を行うことが大切である。教師自身が見取りの基準をもちつつ、子どもの変容を捉えられるように、教師が子どもの様子を具体的に語り合いながら、子どもの見取りの根拠を明確にしていくことも重要である。

今後は、ポートフォリオを活用して多面的・多角的評価の実践に努めることや、体験的

な学習を含む学びにおいて、指導者と児童生徒が目標を共有し、児童生徒自身の「振り返り」がより充実する学びとなることを目指し、ルーブリック等を活用したパフォーマンステスト等の方法を検討する。

(2) 地域創造学を中核とした12年間の教育課程の編成

本年度は、指定校5校において、「育成すべき資質・能力とは何か」という検討を行い、町教育研究所が分析・整理し、地域創造学で育む社会的実践力を構成する資質・能力について再規定した。併せて社会的実践力の資質・能力の系統表についても修正・改善し、授業実践や年間指導計画の作成を進めてきた。

平成31年度からは整理した力を新設教科「地域創造学」及び各教科・領域で育ていくための教育課程について、年間指導計画を基に実施しながら、検証・改善を図り12年間の教育課程の編成に着手する。

(3) 異校種間の共通理解

これまで、小・中・高等学校教員が参加する教育研究所全体会を開催し、今後目指すべき教育の流れについて共有したり、4研究部会に分かれて、実践事例交流や研究協議を行ったりしながら、共通理解を図ってきた。

本年度、ステージ毎の実践を通して、校種間の学びや育ちが円滑につながっていくように、単元計画や実際の児童生徒の学習方法について、小・中・高等学校教員全員で見通しながら進めていく必要があることが明確になった。ステージ内においては、地域創造学の「学習内容の系統性や反復性」、「学習方法の積み上げ」をより意識し、その効果について協議をしていく。また、ステージ間の学びのつながりについても、共通理解して進める必要性がある。

(4) 運営指導員からの指導体制について

本年度は、7名の運営指導委員の先生方の御指導を頂きながら、研究を推進してきた。運営指導委員会を開催する上で、過半数の指導委員が一堂に会する機会を持つことの難しさがあり、個別に御指導を頂いたり、1～3名の指導委員の方々に訪問して頂いたりしながら直接の御指導を受けてきた。第2回、第3回については2月、3月に予定している。

次年度についても、引き続き継続的な指導体制を整えながら進める。

(5) 持続性のある研究体制の構築

12年間の子どもの育ちを考える研究であることから、継続的に検証や改善をしていくことのできる研究組織へと体制を工夫したい。本年度改編した教育研究所の組織体制の推進を振り返りながら、他部局との横断的な連携の在り方についても含め、ふさわしい研究体制の在り方について検討を進めていく。

Ⅱ 今年度の取組について

1 今年度取り組んだ研究開発の内容について

(1) 教育課程について

① 今年度編成・実施した教育課程の特徴について

本研究開発は、町教育研究所が町内の小・中学校及び県立学校と連携し、自立して生き抜く力を身に付け、他者と協働してより豊かな人生や地域づくりを主体的に創造することのできる人材の育成を目指し、取り組むものである。この目的を達成するため、小学校から高等学校までが一貫して新設教科「地域創造学」を中核に据えた教育課程を編成・実施することで、人材育成が図られると考えている。

全ての校種が目指す資質・能力「社会的実践力」を12年間という長いスパンで育成していくために、地域と学校が子どもの成長についての展望をこれまで以上に共有し、人材育成に関わる関係者の参画を促すことが可能となれば、地域の活性化にもつながることを期待し、新設教科「地域創造学」を中核に据えた教育課程を編成した。今年度は、各学校で平成30年度試案として作成した社会的実践力の系統表、年間指導計画、学習指導要領解説に基づいて授業実践を行った。

編成した教育課程実施を中心に、本年度は以下の取組を行った。

ア 12年間の教育課程と指導方法、評価方法等の開発について

現在は小学校から高等学校まで全ての校種が、全学年において昨年度に試案として作成した社会的実践力の系統表、年間指導計画、学習指導要領解説に基づいて新設教科「地域創造学」の授業実践を行っている。特に小・中学校における年間指導計画では、それぞれの学年に「共通単元」を設定し、二つの学校の児童・生徒による交流場面の創出にも取り組みながら、実践を重ねた。異校種の教員が参加する授業研究会等を通じて、社会的実践力を育成していくための内容となっているか、児童生徒の主体性を重視した指導方法がどうあるべきなのか等について議論を重ね、年間指導計画の見直しを行った。

評価方法の開発に関しては、「評価検証部会」を中心に、児童・生徒の社会的実践力がどのように身についたのか見とるための評価の方法について検討を行った。全ての学校の教員が実践交流を行いながら、特にパフォーマンス評価の在り方に関する検討・協議を進めることができた。また、新設教科「地域創造学」の実施による児童生徒の学習の変容や、学習への達成感をとらえる一手法として検討した、教育達成測定を実施した。設定した質問項目をとおして、教職員全体で具体的な子供の育ちの姿を共有することができるよう、教師の見取りとあわせて有効活用していきたい。測定の精度を高め、その妥当性を検証するため、本町と地域環境が類似している県内の中山間地域である西和賀町の小・中・高5校に協力を依頼し、同じ教育達成測定を実施し、比較検証を行った。年度初めと各学期末の計4回行い、12の資質・能力がどのように児童・生徒に身につけているのかを検証した上で、さらに効果的な地域創造学の単元構成や指導方法、評価の在り方を追究していきたい。

イ 地域創造学を据えた教育課程の編成について

各教科等と地域創造学に通ずる資質・能力を明らかにした上で教育課程を編成する必要がある。

今年度は、各校の教務主任が所属する「学校カリキュラム検討部会」において、各校の教育課程の中に新設教科「地域創造学」が適切に位置付けられるように、学校経営計画の全体的な見直しを行った。また、「地域創造学」が教科横断的な視点から実施されるようにするために、地域創造学の資質・能力と、各教科等の資質・能力における汎用性のあるものを明確化し、教科・横断的な視点で育成することを目指して作成した関連表についても見直し、修正を行った。

小学校教員と保育士を中心に編成された「就学前教育研究部会」においては、小学校での地域創造学の実施に伴い、これまで両小学校区における保小連携の基礎として策定し活用している「すみた幼児教育（保育）プラン」のうち、年長児と小学校1年児童が目指す姿と、社会的実践力との関連を検討した。この検討を基に、小学校入学期前後のスタートカリキュラムの策定を行った。

② 教育課程の内容は適切であったか

今年度も、他校の教員が各学校で実施する校内授業研究会に参加することのできる、相互交流事業を継続し、年間指導計画、学習指導要領解説に基づいた授業実践内容を共有した。（14回開催）相互交流では、ねらいとする社会的実践力を育成するための学習内容・単元構成となっているか、学年・ステージ・校種の系統性を意識して社会的実践力を育成していくための学習内容や指導方法、評価方法等について学校や校種を越えて議論し合い、見直しを図った。意図的・計画的に「地域創造学」を実施していく中で、児童・生徒が主体的に探究活動に取り組む姿勢が顕著に表れてきたことなどが意見として出され、地域創造学を位置付けた、体系的に一貫性のある教育課程を実施することが、これから求められる資質・能力の育成に有効であるとの共通認識を持つことができた。町教育研究所の4研究部会及び全体会等で、よりよい教育課程や評価方法、指導方法等についての議論を重ね、来年度の方向性について全職員で共有することに加え、11月に開催した全5校による授業公開研究会では、町外からの参会者を交え、実施している教育課程の内容と、児童・生徒の育ちとの関連について、様々な視点から協議することができた。年度内には、各校の代表者、町教育委員会と、地域創造学の学びにご協力をいただく地域の方々が集まり、地域創造学の構想や学習予定、協力を要請したいこと、地域の方々からの助言や意見等を直接お聞きする場として、「地域創造学協力者会議」を開催する。教員だけの議論で終始せず、地域と学校が連携して児童・生徒の社会的実践力を育成していく体制を強化していきたい。

このように、社会を生き抜き、地域を支える人材を育成するというビジョンは学校の内外と共有することのできるものへと広がりを持ちつつあり、教育課程の内容が適切であることの表れと捉えている。

③ 授業時間等についての工夫

必要となる教育課程の特例として、それぞれの校種において

ア 小学校では、生活科、道徳、外国語活動及び総合的な学習の時間を減じて、全学年において「地域創造学」を1年生106時間、2年生110時間、3、4、5、6年生では85時間実施した。

イ 中学校では、全学年において、道徳、外国語及び総合的な学習の時間を減じて「地域創造学」を1年生では62時間、2、3年生では82時間実施した。

ウ 高等学校では、1学年においては総合的な探究の時間を減じて、2・3学年においては総合的な学習の時間を減じて、「地域創造学」をそれぞれの学年で1単位35時間設定した。

今年度の各校の実践や、学校カリキュラム検討部会における協議、各教科・領域等との関連を分析しながら、「地域創造学」を含む特別の教育課程が、より効果的に本町児童・生徒の力を高めていく役割を果たすよう、授業時間等の工夫について今後も探っていく。

(2) 指導方法・教材等について

① 実施した指導方法等の特徴

地域創造学の指導方法の工夫・改善を多角的視点から行った。

ア 体験活動を伴う学習活動の指導方法の在り方について

児童・生徒が学びの意義や価値について実感を持ちながら学習が展開できるよう、特に、体験活動を伴う学習活動の指導方法の在り方について考える実践を展開することが出来た。以下は、本年度、各校種で地域創造学に位置付けた体験活動の種類をまとめたものである。第1ステージから第2ステージは、地域の良さに気づき地域の理解を深める活動を、第3ステージから第5ステージにかけては町の課題に主体的に向き合い、課題を知ることや課題解決に取り組む探究活動を取り入れていくことができた。社会的実践力の系統表を基に、ステージの段階によって何を目指させていくのかについて校種を越えてさらに議論を重ね、共通理解を図っていく。

【R1 地域創造学に位置付けた体験活動】

小学校	中学校	高等学校
学校探検、植物の栽培、生き物飼育、町探検、郷土芸能、水生生物調査、キャップハンディ体験、野外活動（種山高原）、町のよさや課題を考える活動（町内でのリサーチ、まとめ）等	町の魅力を高めるためのプロジェクト活動（町内でのリサーチ、プラン作成と実践等）、農業体験、職場体験、福祉体験、等	インターンシップ、地域文化選択講座、町の課題を解決するためのプロジェクト活動（町内でのリサーチ、プラン作成と実践）、桜植樹ボランティア、小学生への読み聞かせ活動等

イ 住田型探究のプロセスの実施

地域創造学では「①課題の設定、②情報の収集、③アイデアの拡散と収束、④アイデアの具現化、⑤改善、⑥まとめと振り返り」というプロセスが発展的に繰り返される「探究的な学習過程」を重視した

学習を展開している。6つのプロセスは①～⑥の一方向に限定せず、児童・生徒の進行状況を詳細に見とりながら、学習状況に応じてプロセスを往還することなども含めて、探究活動を柔軟に行わせることができた。①から④のプロセスの段階に関しては、教師が共に考える視点を持って、児童・生徒に問いを繰り返しながら視点を広げていくことの重要性についても共通理解を図ることができた。

本年度の実践を踏まえ、今年度取り組んだ探究のプロセスの妥当性について検討し、次年度計画の作成に活かしていく。

ウ 言語活動の位置付け

充実した言語活動を活動の中に適切に位置付けることは、思考力・判断力・表現力等の育成を図る上で重要である。また、他者と協働してよりよい考えを作り出したり、方向性を見出したりする上で、コミュニケーションに係る資質・能力は必須である。探究的な学習活動の中で、学んだことを発表する場面では、主体的な活動を通して形成された自己の考えを他者に伝える場合には、相手意識を持たせるよう留意して指導を行った。その結果、自分が伝えたいことをポイントを押さえながら発表しようとする様子が見られ、学びが一層深まってきた。

エ 主体的な思考を促す適切な支援

児童・生徒の主体的な思考を促すための適切な支援の在り方については、各校校内研究会において、探究的な学習のプロセスの在り方や発問の質に関して活発に意見が交わされた。教師が児童・生徒をプロセスの通りに主導して導いていくのではなく、児童・生徒が主体的に探究のプロセスを辿っていくために、教師がどのように関与するべきか、研究授業での実践場面に基に議論を深めた。

オ 地域創造学に関する異校種の指導との接続について意識した指導の工夫

各ステージにおける社会的実践力の系統表や年間指導計画を基に実際に授業実践を行ったことで、小学校から高等学校までの12年間を見通した上で、次のステージを見据えて当該学年では何を重点的に指導していかなければならないのか、という議論が校種を越えて活発に行われた。校種を越え、小・中・高の12年間でいかに滑らかに児童・生徒の社会的実践力を育成していくのかについては本研究開発の根幹にあたる部分であり、今後も実践結果を基にした議論を重ね、よりよいカリキュラム開発に取り組んでいく。

カ 教科横断的な視点で資質・能力を育成すること

「地域創造学」が教科横断的な視点から実施されるようにするために、地域創造学の資質・能力と、各教科等の資質・能力における汎用性のあるものを明確化し、教科・横断的な視点で

育成することを目指して作成した関連表を作成しているが、これについても、指導実践を重ねると共に、見直し、修正を行っている。各教科等が固有に持つ特質と、社会的実践力との関連する幅には違いがあるが、社会的実践力が形成される過程では、子どもたちが今後生き抜く社会を意識し、未知の状況においても発揮され、生きて働く力として他教科等との学習と相互に関連付けられた学習が必須であり、教師が教科横断的な視点で指導を行うことは重要である。

また、子どもたちの内面により深く残り、活用される力として社会的実践力を育成する指導方法について探るという視点から、「特別の教科 道徳」については、内容項目のうち、次に示すものを地域創造学として指導している。

B 主として人との関わりに関すること「相互理解、寛容」

C 主として集団や社会との関わりに関すること

「伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度」

D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること「自然愛護」

これら3つの内容項目に関わる地域創造学の授業実践に関しては、「特別の教科 道徳」における授業とどのように違いを持たせて「地域創造学」としての授業に含んでいけばよいのかについて議論を行った。今後、さらに実践を重ね、よりよい授業の在り方を追究していく。

② 指導方法等は適切であったか

実施した指導方法等の特徴に挙げたア～カは、いずれも12年間を見通して社会的実践力を育成していく上で必要な視点であり、児童生徒に応じた指導方法等の工夫として適切なものであると考える。今後も、継続して実践を行い、より有効な指導方法になるよう、質的に改善を図っていく。

2 実施の効果について

(1) 児童・生徒への効果について

今年度は、昨年度に試案として作成した社会的実践力の系統表、年間指導計画、地域創造学学習指導要領解説に基づいて「地域創造学」が実施し、地域を題材とする学びが展開された。地域のよさや課題を探究した6年生の児童からは、「もっと地域のことを調べたい」、「自分の課題を解決するためにもっとこんな資料が欲しい」という声があったことが報告されている。調査活動を行ううちに、調査計画段階では想定していなかった新たな疑問が生まれてきたことがうかがえる。児童・生徒にとって身近な地域資源を題材に、主体的に課題設定や情報収集などの探究のプロセスを踏んでいくことで、探究意欲が高まってきたことの表れであると考えられる。

また、探究活動で学んだことを発表する場面では、主体的に形成した自己の考えを相手意識を持って他者に伝える場面や、他者の意見を建設的に受けとめながら、自己の考えを深める場面が多く見られた。また、他者の発表に対して多面的・客観的な視点から意見を述べただけでなく、自分の思考を内省的に吟味する場面も見られ、批判的思考力の高まりも感じられた。

今年度、児童・生徒の学習の変容や達成感を捉えるために実施している教育達成測定についても今後分析を進め、地域創造学の効果的な単元構成や指導方法、評価の在り方につなげていきたい。

(2) 教師への効果について

昨年度に試案として作成した社会的実践力の系統表や年間指導計画、学習指導要領解説に基づいて授業実践を行っているが、授業実践を行う過程において、児童・生徒の実態に基づき、指導計画に修正を加えて実践している例が多く見られる。児童・生徒に社会的実践力を育成していくために、どのような指導方法や指導内容が適切であるのかを追究する意欲の表れであると捉えられる。

また、昨年度に引き続き、小・中・高5校で年間14回の研究授業公開を開催したが、同校種だけでなく、異校種の研究会に多くの教員が参加し、保育園年長児を含む13年間を貫く社会的実践力の系統表に基づいた年間指導計画の在り方や効果的な指導方法、評価の在り方について活発に議論を交わした。実践結果を基に、指導に関しては発達段階に応じてより児童・生徒の主体性を意識した指導を行っていくこと、内容に関しても地域を知り理解を深める段階から地域の課題解決を考え、実行・提言していくような枠組みを考えていくべきなのではないかという意見等が出されたことは大きな成果であると言える。夏休みの教育研究所の学習指導検証部会においては、このような考え方に基づいて、昨年度末に作成した年間指導計画の1学期分の修正作業が行われた。冬休みには2～3学期分の修正作業を予定している。

また、社会的実践力の系統表に基づいて、各ステージでどのような力をどこまで育成して次のステージへつなげていくべきなのかなど、校種を越えたマクロの視点で指導計画や指導内容について考えられるようになってきたことも大きな成果であると考えられる。このような視点は、地域創造学に限らず、教科の学習においても大切にしていかなければならないものであり、日常の授業改善の意識の向上につながっていくものであると捉えられる。

(3) 保護者等への効果について

「地域創造学」の本格実施に関わって、小学校児童の保護者からは、児童が調査してきた「地域のよさ」に関わる特徴をもっと地域全体に発信し、地域を盛り上げてほしいという声があったことも報告されている。児童・生徒がこれからの地域の在り方や、よりよい社会作りについて考え、地域の活性化に資することは地域創造学のねらいの一つでもあり、今後このような声がさらに増えることが予想される。

また、小・中・高の全ての地域創造学の授業において、調査活動におけるアドバイザーやゲストティーチャーとして地域の方々に参加していただいたことは、児童・生徒が体験活動を基にどのように学びを深めたり変容したりしているのか見届けていただく機会として有効であった。教師と地域の方々が育成したい社会的実践力を共有し、連携して授業を進めていくことが、決して特別なことではない環境が着実に整い始めている。アドバイザーとして授業に参加していただいた地域の方々の中には、「事前にこのようなことを学習してきた方が、調査活動がより意味のあるものになる」など、指導計画の在り方に関して助言してくださる方々も見られるようになってきた。学校だけでなく地域全体で地域創造学を進め、地域全体で児童・生徒を育てていくのだという意識の高まりであると捉えている。

また、地元のケーブルテレビや新聞社等の報道機関とも連携し、公開授業等を頻繁に情報発信することで、保護者を含む地域の方々の理解が深まってきている。小・中・高を通じて児童・生徒の地域創造学におけるフィールドワークの回数が大幅に増加したことや、中間発表会などで地域の方々や保護者を巻き込んだ活動を行ったことも、地域全体に地域創造学を理解していただくことにつながった。今後、保護者や地域の方々への「地域創造学」に関わるアンケートを実施し、その結果を基に、教育課程全体のさらなる改善を行っていきたい。

3 研究実施上の問題点と今後の課題

(1) 地域創造学を中核とした系統性のある12年間の教育課程の編成について

今年度は、昨年度に試案として作成した社会的実践力の系統表や年間指導計画、学習指導要領解説に基づいて授業実践を行ったが、年間指導計画の内容が社会的実践力を系統的に育成していくものになっているか、更に検討していく必要がある。具体的には、育成したい資質能力と単元の学習内容の整合性、単元の学習内容の学年間・ステージ間の整合性、地域創造学と各教科の系統性などが挙げられる。

また、共通単元を実施する上で、学校間の協働学習等の在り方についても検討を継続していく。指導方法に関しては、児童生徒の思いや考えに寄り添った指導の在り方、結果や発表よりも、学習過程を重視した指導の在り方をさらに追究していかなければならない。小学校から高等学校までの12年間を見通した上で、社会的実践力の系統表と照らし合わせながら、どのような内容が以後のどの学年やステージにつながっていくものなのか、そのために各学年や各ステージにおける指導の在り方はどうあるべきなのかについて、校種を越えてさらに議論を重ね、内容の修正や指導の改善を行っていく。

(2) 地域創造学の評価の在り方の検討について

地域創造学を含む教育課程が、児童・生徒にどのような影響を与えるのか、適切な評価の在り方を検討している。

今年度は、作成した教育達成測定を実施し、設定した質問項目への回答状況を通じて、児童・生徒の学習の変容や、学習への達成感をとらえることに取り組んだ。他の協力校との比較分析結果や、教師の見取りとあわせて、分析・検証を継続していく。

また、地域創造学におけるよりよい評価を検討する上で、ルーブリック等を活用したパフォーマンス課題の設定について、引き続き検討を行っていく。設定したパフォーマンス課題やルーブリックがその学習単元の内容に対して本当に適切なものとなっているのか、さらにはそれらを活用して、学習者が自己の学習についてメタ認知的に振り返ることができるような、「学習者のための評価」にできているのかという部分に関しては、まだ課題が多くある。ポートフォリオを活用して多面的・多角的評価の実践に努め、検証を進めていく必要がある。

(3) 異校種間連携について

本研究は小・中・高等学校を貫く12年間の学びであり、異校種の連携は必要不可欠である。今年度も全体会や校内研究会の相互交流、各部会での取組の中で校種を越えて議論が交わされ、目指していくべき教育の方向性に関して教師同士の共通理解は徐々に深まってきたように感じている。町内学校の教員にも、12年間の学びという意識を持ち、他校種の学習内容や指導の在り方を視野に入れた考え方をもち、他校種の学習内容や指導の在り方を視野に入れた考え方をもち、議論に参加する姿が表れ始めているが、今後、さらに関係を密にし、「指導者の協働」として、単元の系統性をより強く意識した修正を行っていく必要がある。

また、この12年間を貫く教育課程をさらに生かしていくためには、異校種の教師の連携だけでなく、異校種の生徒が学び合う場を設定することも効果的であると考えられる。校種をまたい

で発表する場を意図的に設けることや、「学習者の協働」として「発表」に限らない協働学習の可能性を探っていく必要がある。

(4) 地域との連携の強化について

現在、小・中・高等学校を通じて、地域の方々をゲストティーチャーとして招いた調査活動を数多く行っている。その中で、地域の方々から地域創造学の在り方に関わるご意見をたくさんいただいている。また、地域創造学を学んでいる児童生徒の保護者からも、もっと地域のよさを発信して欲しいなどのご意見をいただいている。このことにより、学校が地域と共に児童生徒の社会的実践力を育成していくためには、年間指導計画を作成していく段階から地域の方々に関わっていただくことが大切である、という視点を得ることができた。今後、学校や教育委員会が定期的に地域の方々からご意見をいただく場を設けながら、地域との連携をさらに深めていく必要がある。また、地域の方々と地域創造学を行ったことによる児童生徒への効果を共有し、さらに理解を得ることのできる方策について検討していく。

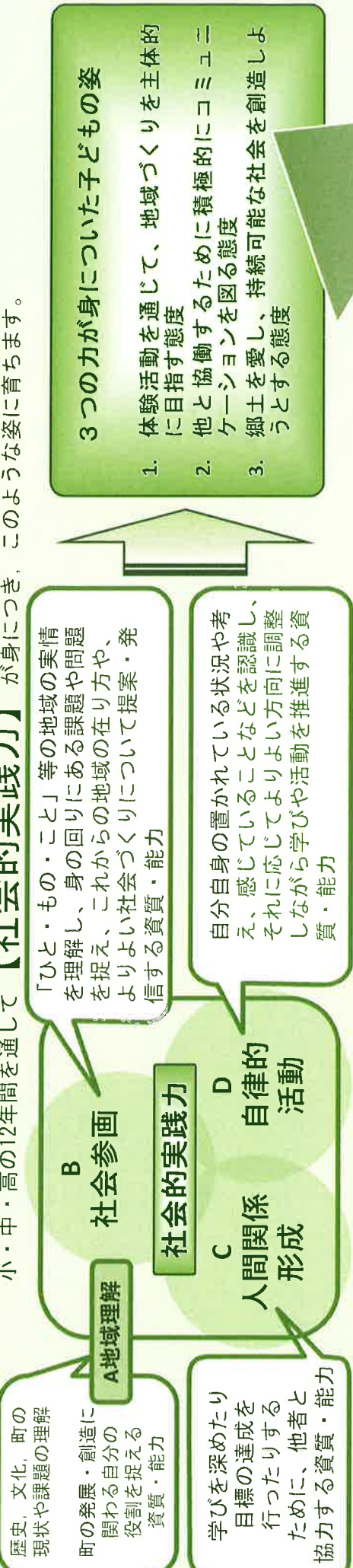
Ⅲ 別添資料

住田町研究開発グラウンドデザイン

～住田町の教育理念～

自立して生き抜く力を身に付け、他者と協働してより豊かな人生や地域づくりを主体的に創造することのできる人材の育成

小・中・高の12年間を通して【社会的実践力】が身につく姿に育ちます。



そのために住田町では、平成29年度から4年間にわたり、文部科学省・研究開発学校指定の教育活動を推進しています

新設教科【地域創造学】

【目標】
住田町及び近郊地域社会をフィールドにした横断的・総合的な学習を、探究的な学習活動を意図的・計画的に行うことを通じて、新しい時代を切り拓き、社会を創造していくための社会的実践力を身に付けた心豊かな人材を育成することを目指す。

横断的・総合的で探究的な学びの実現

➤ 探究のプロセスを6つの要素に整理

地域との協働

➤ 地域創造学の目標を町民と共有

➤ 外部人材の活用

問題の理解
現状把握

探究のプロセス

課題への取付き
課題設定

情報収集
計画する
見通しを持つ

まとめ
振り返り

実施・改善

～住田の教育のしくみ～

小学校～中学校～高等学校の12年間を通して

横断的・総合的で探究的な学習活動



第2ステージ 小学校3年～小学校4年

第3ステージ（異校種） 小学校5年～中学校1年

第4ステージ（異校種） 中学校2年～高校1年

第5ステージ 高校2年～高校3年

12年間の住田の教育でめざす資質・能力

A 地域理解		B 社会参画		C 人間関係形成		D 自律的活動	
1 見通す力	2 多角的・多面的に考える力	1 見通す力	4 好奇心・探究心	1 広え合う力	1 感じ取る力	2 協働する力	3 他者受容
3 提案・発信する力	5 困難を解決しようとする力	2 協働する力	3 他者受容	2 創出する力	3 自己肯定感		

小・中・高連携

～12年間で5つのステージに～

